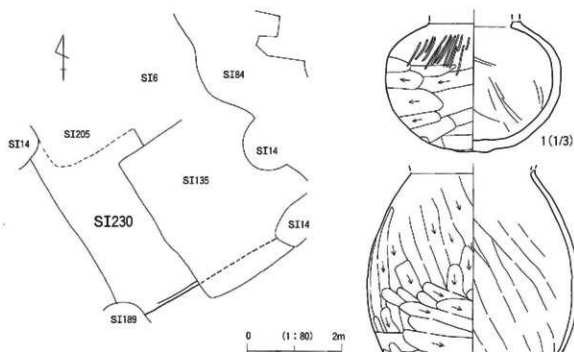


11区230号住居

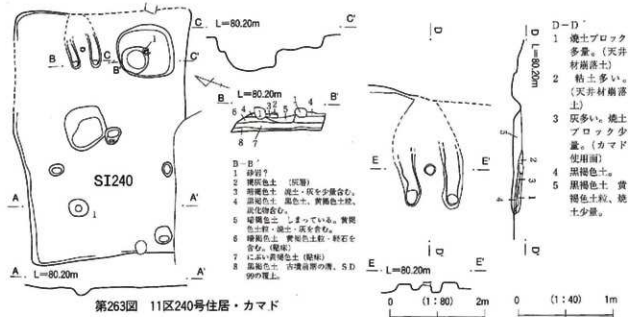
位置 11区 規模形状 重複が激しく残りの悪い住居であった。西と東の壁が直交するので、形状は方形と推定される。南北4.00m + a、東西3.6m + a、残存壁高0.11mを測る。主軸方位 北-35°-西 重複 221号住居を掘り込む。135号・205号・12区6号住居、14号掘立柱建物の柱穴に壊される。床面 は平坦である。カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器・土・埴 所見 5世紀後半



第262図 11区230号住居・出土遺物

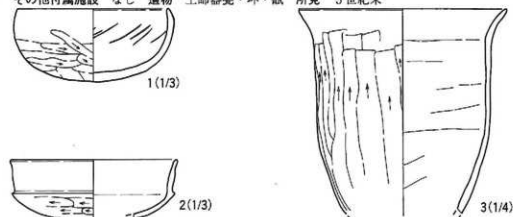
11区240号住居

位置 11区 規模形状 東西に長い長方形を呈し、長辺5.40m、短辺3.70m、残存壁高0.10mを測る。主軸方位 東-25°-北 重複 99号溝の上につくられる。159号住居を掘り込み、16区96号住居に壊される。



第263図 11区240号住居・カマド

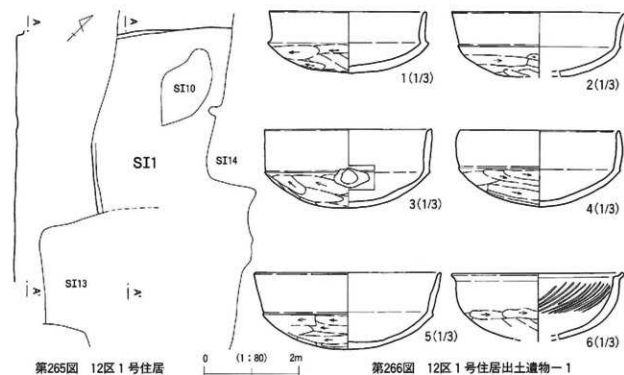
床面 平坦面を形成し貼床が認められる。カマド 東壁中央部よりやや北側に位置する。カマドの東半分は削平されていた。焚き口幅0.30mを測る。奥行は不明である。粘性の強い黄褐色土で構築され、両袖先端部の袖石は砂岩であった。燃焼部内は中央から砂岩製の支脚を検出した。柱穴 1基検出している。柱穴1 長軸0.38m短軸0.35m深さ0.14m 貯蔵穴 南東隅に位置する。不整形円形を呈し、長軸1.20m、短軸1.10m、深さ0.41mを測る。その他付属施設 なし 遺物 土師器・土・埴 所見 5世紀末



第264図 11区240号住居出土遺物

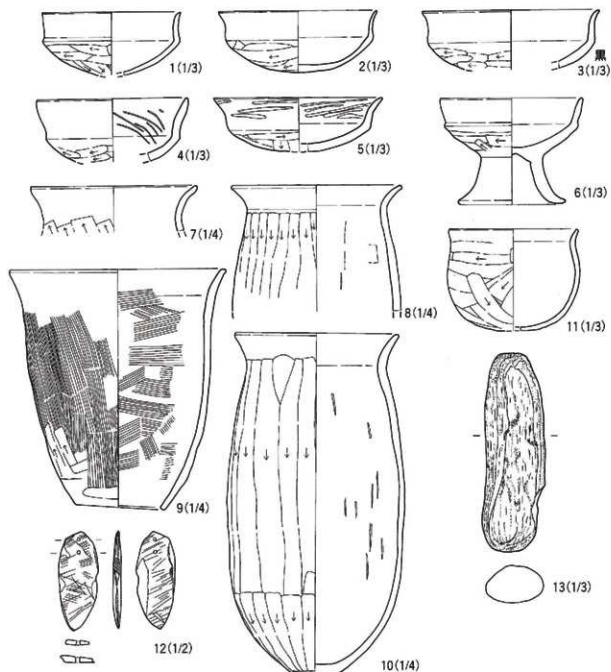
12区1号住居

位置 12区 規模形状 南北は少なくとも3.70m + a、なお、両方から住居が壊されているため東西幅は計測できない。残存壁高0.12mである。住居形状は方形と推定される。主軸方位 東-44°-北 重複 8号・10号・13号・14号住居に壊される。床面 平坦面を形成しているが、部分的に地山の礫が見える。カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器・土・埴・高坏・壺、石製紡錘車、石製模造品・刺形・勾玉 所見 6世紀初頭 備考 内口縁と内斜口縁の形態がやや変化している。須臾器蓋模様の坏は口径が大きい。No.3の坏は、体部に意図的な穿孔が見られる。石製模造品の存在とともに、祭祀の意味合いが考えられる。



第265図 12区1号住居

第266図 12区1号住居出土遺物-1

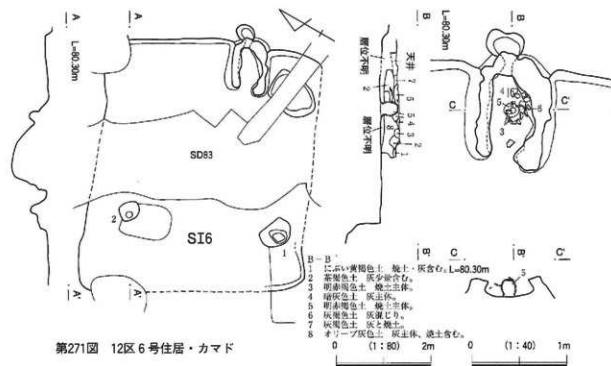


第270図 12区3号住居出土遺物

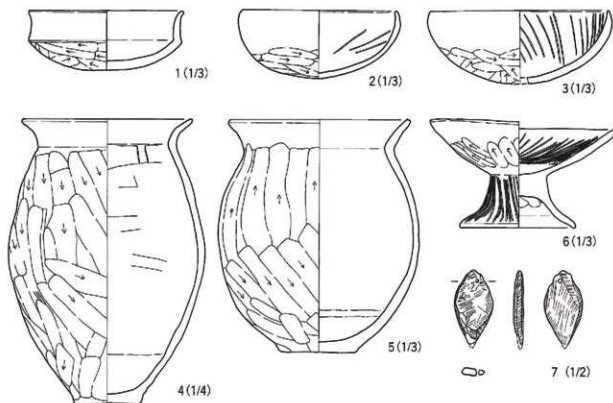
12区6号住居

位置 12区 規模形状 東西5.40m南北4.70mの長方形で、残存壁高0.32mを測る。主軸方位 東-28° 北-重機 古墳前期の99号溝が埋まった後、その上につくられる。12号住居を掘り込み、21号土坑と中世の83号溝に壊される。床面 平坦面を形成している。部分的に貼床がみられる。カマド 東壁中央やや南寄りにある。焚き口幅0.55m、煙道まで含めた奥行1.40mである。カマドの中央には、小屋の竈が伏せられ支脚としている。カマド奥の標高部分には天井が残っている。カマド底面は燃焼部から煙道にかけて徐々に上がり、その途中で急激に立ち上がる。煙道はさらに続くと考えられるが、その先は削平のため確認できない。柱穴 2基確認されている。柱穴1 0.75m×0.50m、深さ0.36m 柱穴2 0.45m×0.40m、深さ0.36m 貯蔵穴 南東隅にある。長軸1.08m短軸0.76mの平面楕円形で、深さは0.43mを測る。その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・坏・

高坏 所見 6世紀初頭 備考 内湾口縁の坏がある。内面の暗文が乱雑になっている。須恵器蓋模倣坏は口縁がやや外反する。



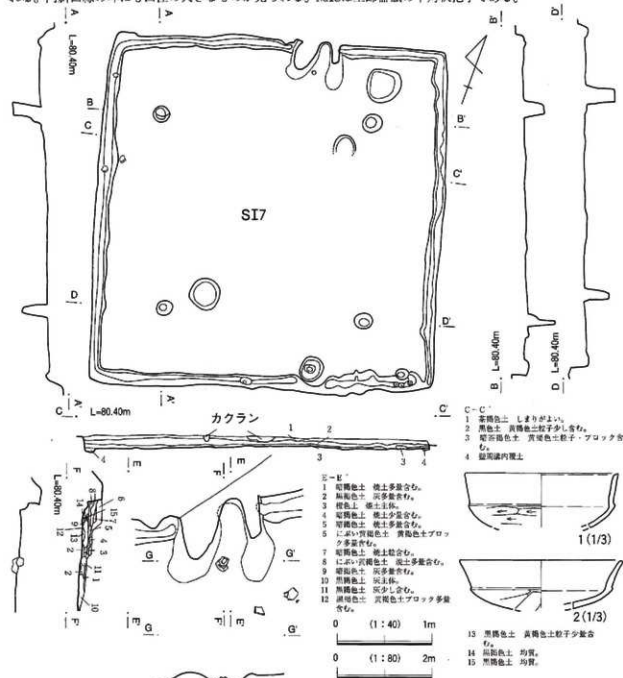
第271図 12区6号住居・カマド



第272図 12区6号住居出土遺物

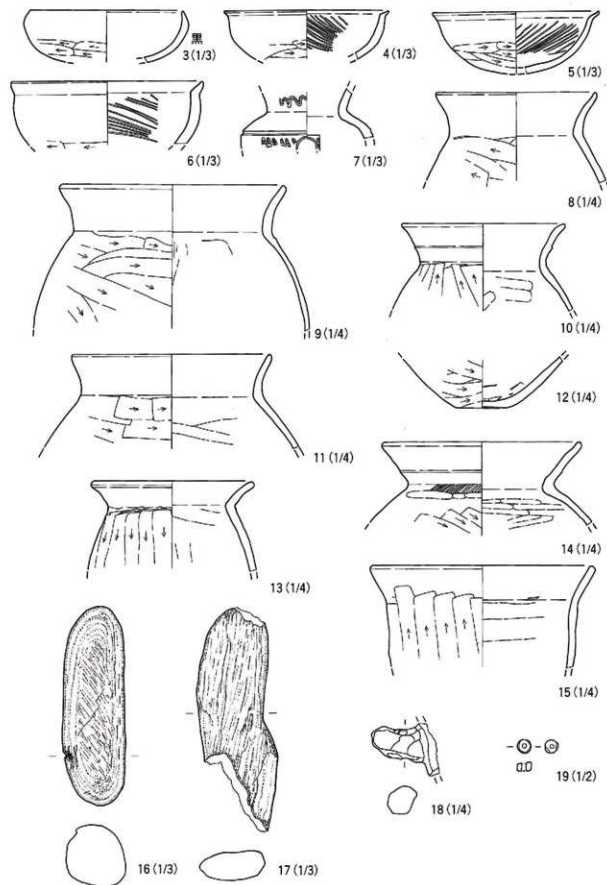
12区7号住居

位置 12区 規模形状 東西7.40m南北7.50mの正方形を呈す。残存壁高は0.29mを測る。 **主軸方位** 北-17° 一西 **重構** 2号・11号・12号・15号住居を掘り込む。 **床面** 概ね平坦で住居中央部がやや高い。跣床がみられる。 **カマド** 北壁中央やや東寄りにある。焚き口幅0.78m奥行き0.90mである。カマド中央に粘土で固めた0.08m程の焼土塊がある。支脚の可能性が高い。カマドの内壁はよく焼けている。カマド底面は、奥にいくにつれ徐々にながら、カマド奥で急激に立ち上がる。なお、煙道は確認できなかった。 **柱穴** 主柱穴が4基検出されている。 **貯蔵穴** カマドの東にある。直径0.70m、深さが0.80mと浅いが、カマドの右脇という位置からも貯蔵穴と考えられる。 **その他付属施設** カマド部分を除いて、壁周溝が巡る。幅0.05~0.20m、深さ0.15m程度である。 **遺物** 土師器・土・灰、須恵器ハソウ 所見 須恵器ハソウ（7）は、MT15併行期と考えられる。内斜口縁の坏にも口径の大きなものが見られる。No18は土師器甔の牛角状把手である。



第273図 12区7号住居・カマド

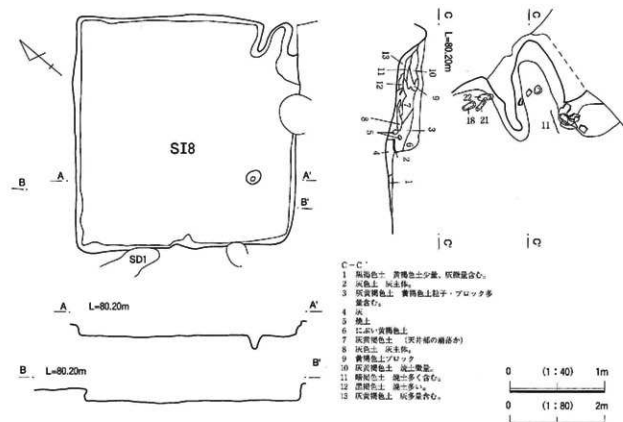
第274図 12区7号住居出土遺物-1



第275図 12区7号住居出土遺物-2

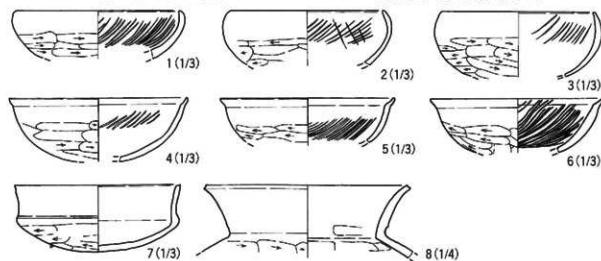
12区 8号住居

位置 12区 規模形状 東西5.00m南北4.80mのほぼ正方形を呈する。残存壁高は0.30mを測る。主軸方位東-40°-北 重複 1号・3号住居、1号溝（推定東山道の側溝）に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 住居の南東隅にある。煙道部は1号住居に壊される。奥行1.05m焚き口幅0.40mである。柱穴 南西の1基が検出された。貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・坏、須恵器甕・ハソウ、鷹楓石、土製羽口（27）、蛇紋岩製管玉（24）、緑色の凝灰質砂岩製管玉（25） 所見 坏は内斜口縁と内寄口縁の坏が主体であるが、内面の暗文が幾分乱れてきたものもある。胴の丸い甕、口縁に段を有す甕など古い要素を残す土器もある。

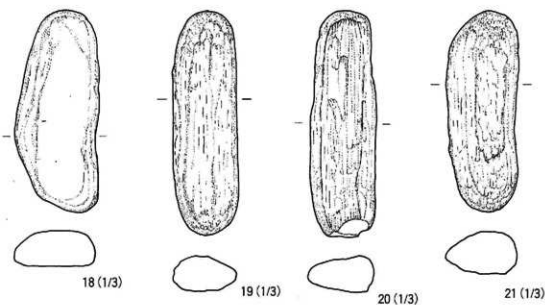
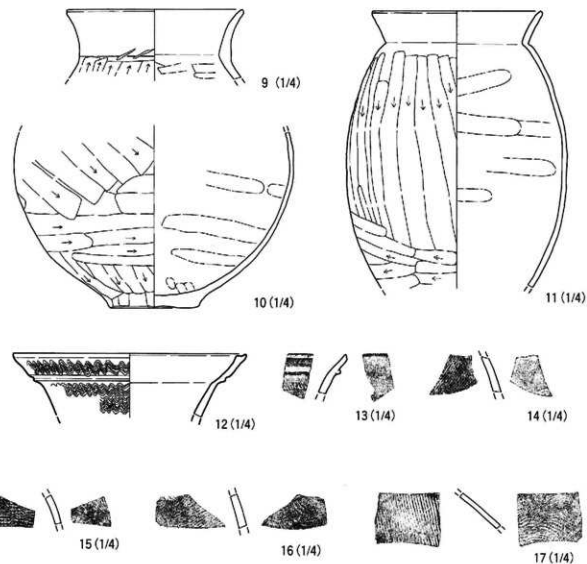


第276図 12区 8号住居

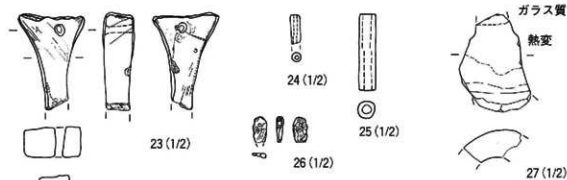
第277図 12区 8号住居カマド



第278図 12区 8号住居出土遺物-1



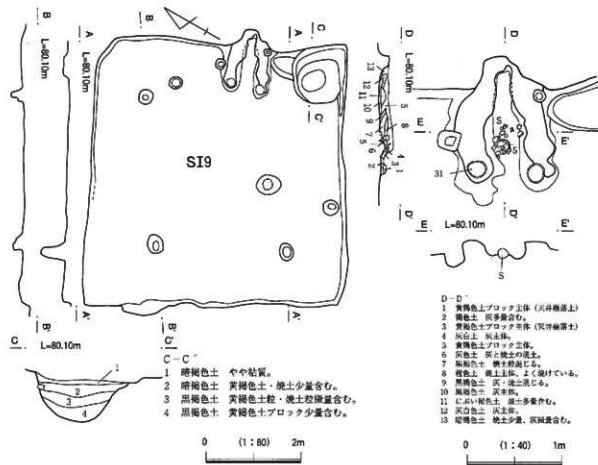
第279図 12区 8号住居出土遺物-2



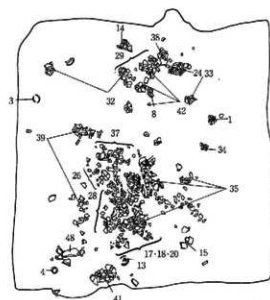
第280図 12区 8号住居出土遺物-3

12区 9号住居

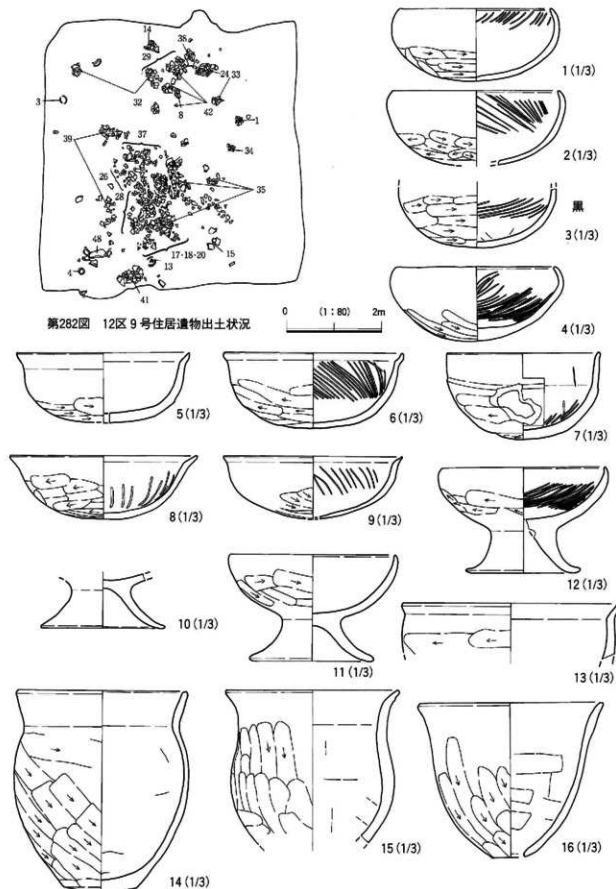
位置 12区 規模形状 東西5.90m南北5.30mの方角を呈する。残存壁高は0.20mである。主軸方位 東-28° 北-18° 重複 4号・13号住居を掘り込む。14号住居に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 東壁中央やや南にある。奥行0.85m突き口幅0.35m、煙道は0.40m残存している。両袖先端部分に土師器甕が埋め込んである。柱穴 貯蔵穴付近を除いて、3カ所主柱穴を確認。貯蔵穴 南東隅にある。平面隅丸方形で、1.18×1.12m深さ0.56m、断面形状は緩やかな台形である。その他付属施設 カマドと貯蔵穴の間に幅0.30~0.40m深さ0.10mほどの溝状施設がある。性格は不明。遺物 土師器甕・杯・高杯・瓶、須恵器甕、高脚石、大型砥石 所見 5世紀末 備考 内斜口線、内弯口線杯が主体で、蓋模倣杯が1点(7)ある。口径12.0cmと小さく体部は深めで丸い。また、この杯は内面に暗文があり、内面からの意図的な穿孔がある。



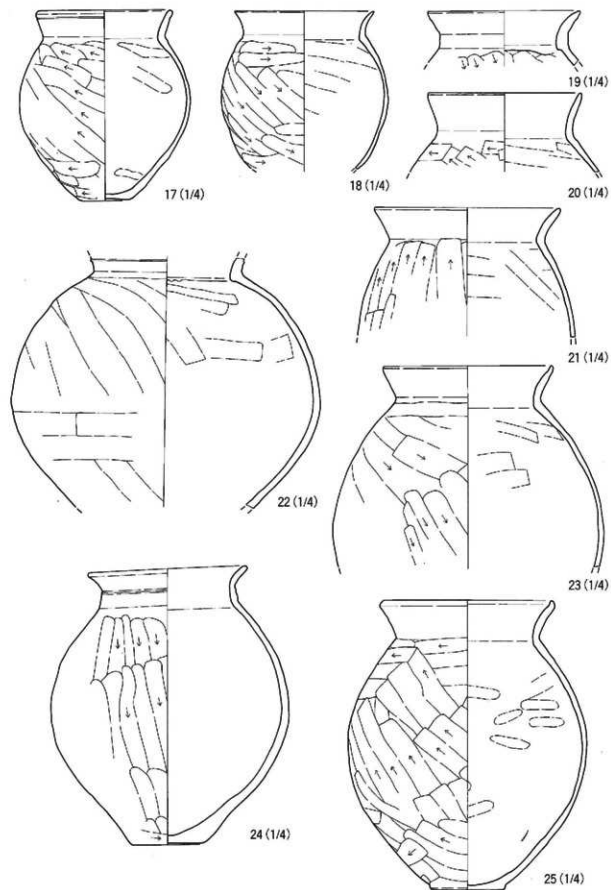
第281図 12区 9号住居・カマド



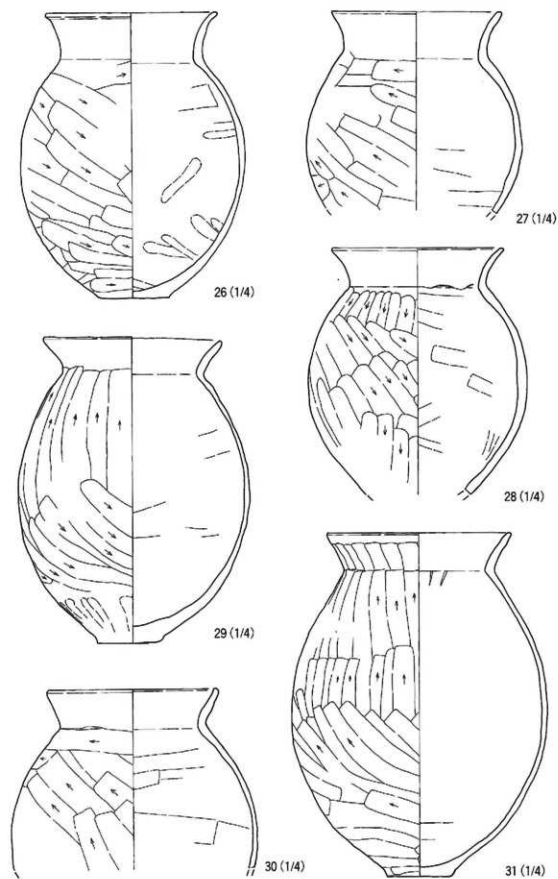
第282図 12区 9号住居遺物出土状況



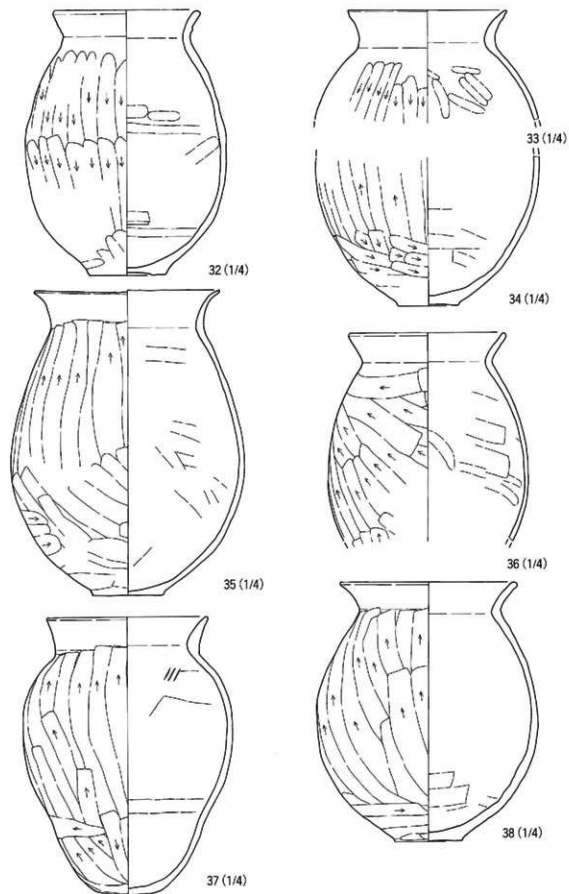
第283図 12区 9号住居出土遺物-1



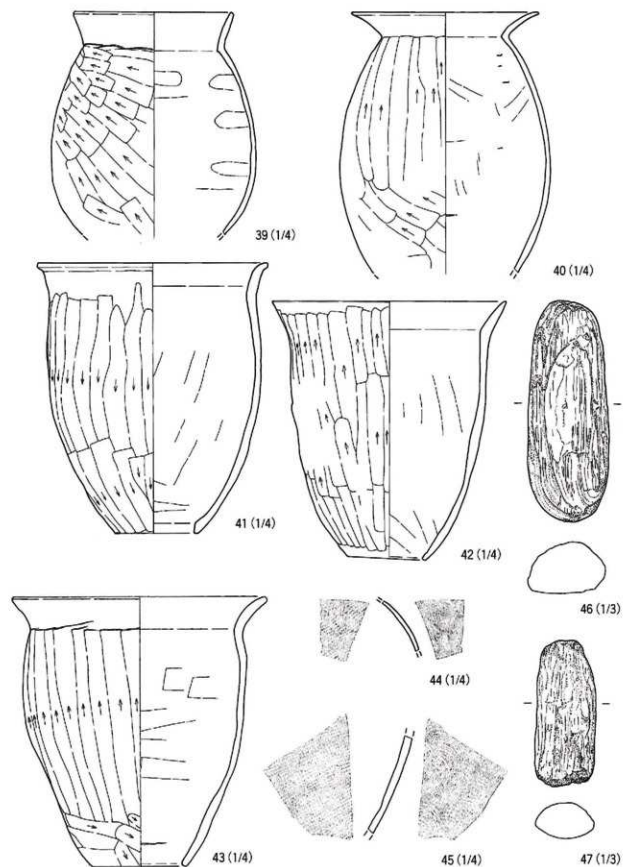
第284図 12区9号住居出土遺物-2



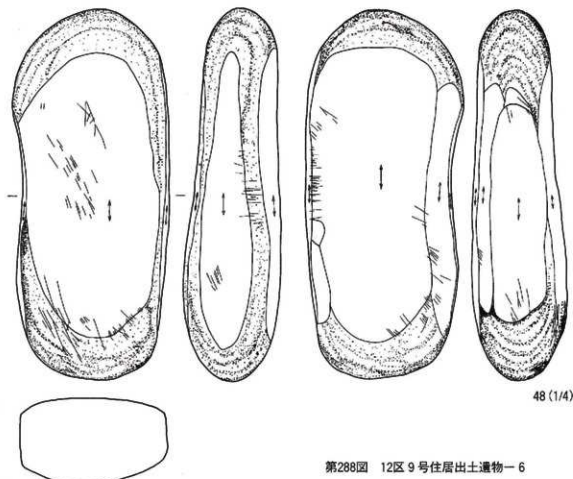
第285図 12区9号住居出土遺物-3



第286図 12区9号住居出土遺物-4



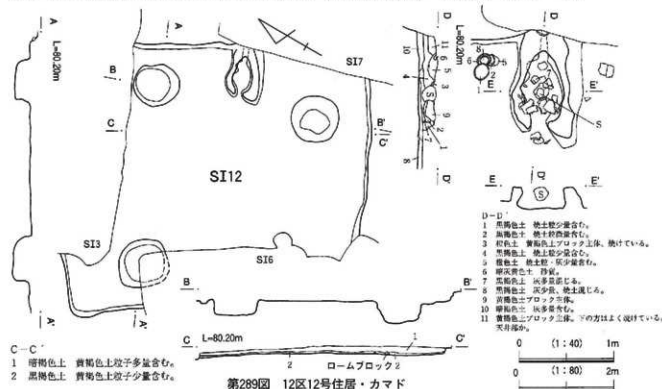
第287図 12区9号住居出土遺物-5



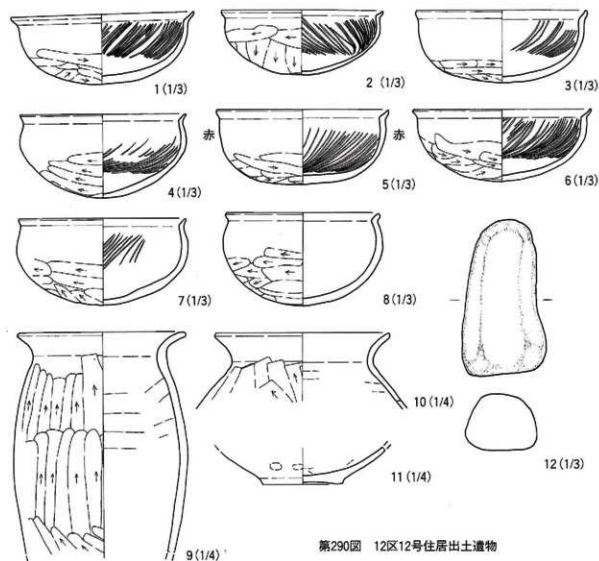
第288図 12区9号住居出土遺物-6

12区12号住居

位置 12区 規模形状 南北6.3m東西5.6mの長方形で、残存壁高は0.16m。主軸方位 東-27°-北



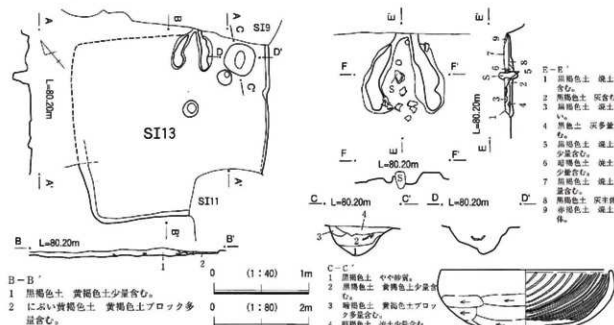
重複 3号・6号・7号住居に壊される。床面 貼床が認められる。全体にフラットである。カマド 東壁中央にある。奥行1.10m、焚き口幅0.25mの規模である。煙道は径0.10m、横に延び天井部が0.25mほど残り、その先は7号住居に壊されている。カマド中央には丸みを帯びた川原石が置かれていた。支脚と考えられる。柱穴 主柱穴が3基検出されている。掘方が径0.9~1.1m大きく、それに対し深さは0.30~0.45mとやや浅めなピットである。貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・坏、鷹輪石 所見 5世紀後半 備考 坏は内斜口縁と内弯口縁が主体で、蓋模範はみられない。内斜と内弯口縁部の口径は大小のばらつきがある。



第290図 12区12号住居出土遺物

12区13号住居

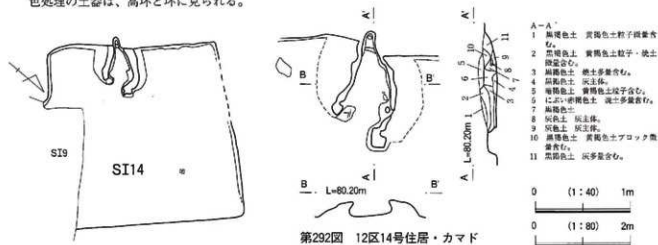
位置 12区 規模形状 東西4.4m(推定)南北4.0m(推定)のはほぼ正方形プランである。残存壁高は0.28mを測る。主軸方位 西-40°-南 重複 1号・9号・35号・36号住居に壊される。床面 やや起伏がある。カマド 西壁中央やや南にある。奥行1.10m焚き口幅0.25m、左袖の先端には川原石の袖石がある。また、右袖は左袖に比べて長い。燃焼部の中央には、長さ20cmほどの川原石を底に埋め込み支脚としている。また、カマド奥では天井部が残り煙道が確認できる。柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 遺物は少ない。土師器坏1個体を図化した。所見 5世紀末



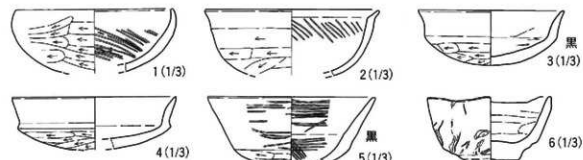
第291図 12区13号住居・カマド・出土遺物

12区14号住居

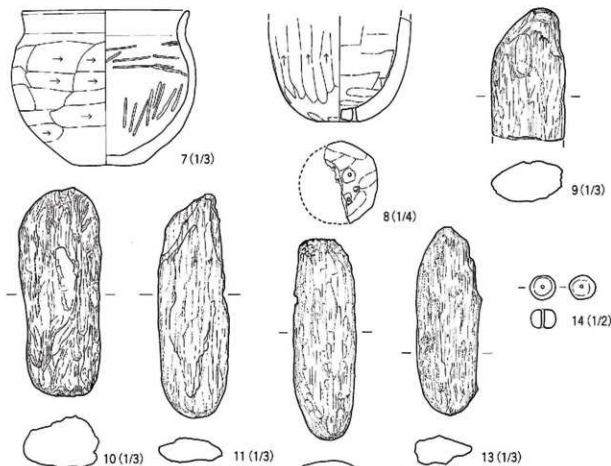
位置 12区 規模形状 3.70m×3.60m (推定) の方形プラン。深さ0.28m 主軸方位 北-25°-西 重複 109号・112号住居を掘り込み、110号住居に壊される。カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器小型甕・坏・高坏・甗、小型粗製土器碗、磨石、土玉 所見 6世紀前半 備考 やや暗文の乱れた内斜口縁・内凹口縁坏とともに、やや小型の模倣坏がある。黒色処理の土器は、高坏と坏に見られる。



第292図 12区14号住居・カマド



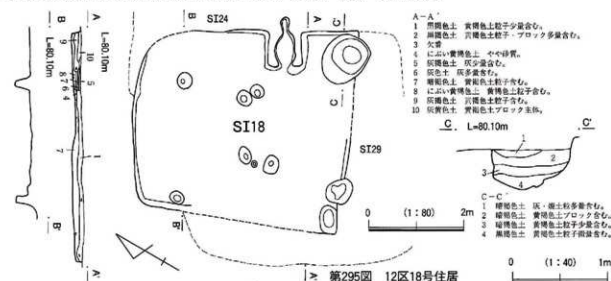
第293図 12区14号住居出土遺物-1



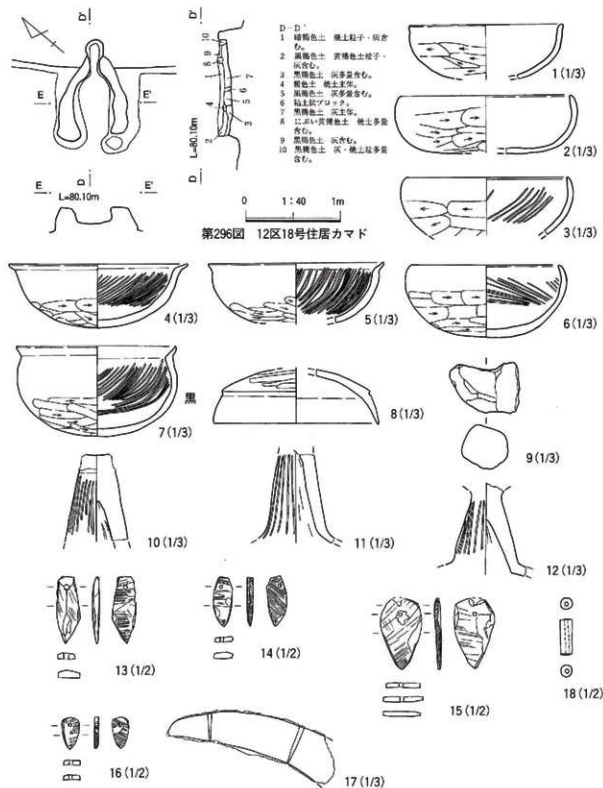
第294図 12区14号住居出土遺物-2

12区18号住居

位置 12区 規模形状 東西4.30m南北4.50mの方形プランを呈する。残存壁高は0.24mである。主軸方位 北-29°-東 重複 24号・29号住居を掘り込む。床面 はほぼ平坦面である。カマド 東壁やや南にある。奥行0.80m焚き口幅0.30mである。極道は0.35m残存している。柱穴 主柱穴を3基検出した。貯蔵穴 南東コーナーに位置する。1.10m×0.85mの平面楕円形で、深さは0.328mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器甕、珪質頁岩製菅玉 (18)、石製模造品銅形、鉄製鎌 所見 6世紀初頭



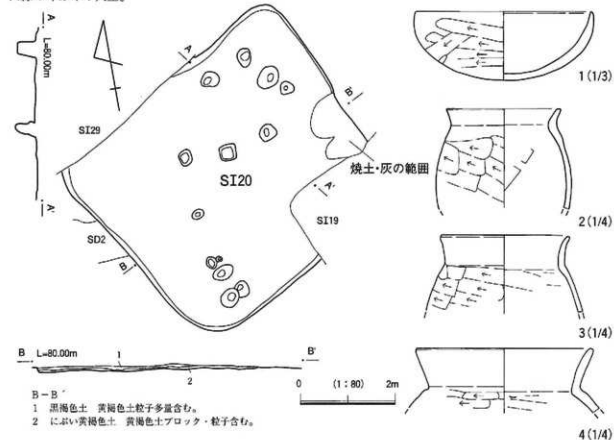
備考 須恵器壺環(8)は口縁がハの字形に開き、天井部は不定方向のヘラケズリ調整である。MT15併行期と考えられる。土師器の内斜口縁と内湾口縁は、体部が深いものと口径の大きいものがある。No 9は土師器瓶の牛角状把手である。



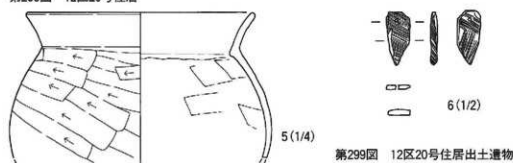
第297図 12区18号住居出土遺物

12区20号住居

位置 12区 規模形状 東西5.80m南北5.10mの方形プランを呈する。残存壁高は0.08mである。 主軸方位 東-30° 北 重複 36号住居を掘り込み、19号・29号住居、2号溝(東山道の北側溝)に壊される。 床面 はほぼ平坦で、中央がやや高い。 カマド 東壁やや南に灰や焼土が広がっている。カマドはすでにないが、ここにあったと推定される。 柱穴 ビットはかなりの数があるが、柱穴としては断定しがたい。 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・環、石製模造品類 所見 6世紀初頭 備考 丸みを持った壺が主体。内湾口縁の環はやや大型。

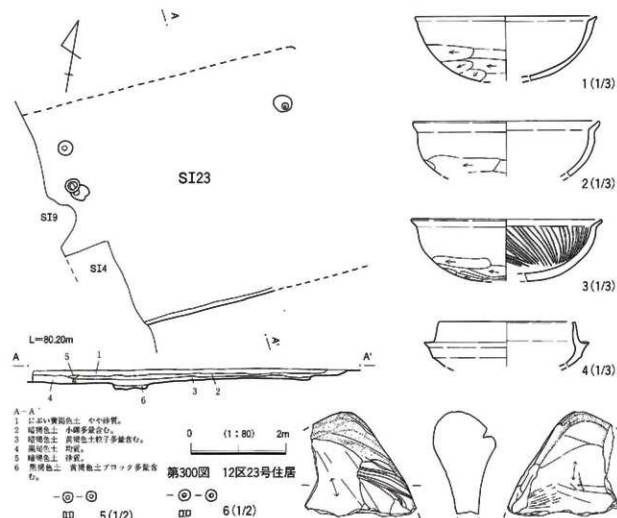


第298図 12区20号住居



12区23号住居

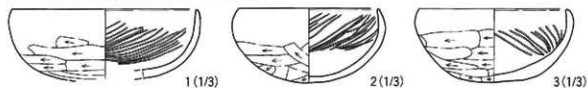
位置 12区 規模形状 住居の南壁を検出した。西側は、ほかの住居に切られる。なお、北と東は不明。 主軸方位 東-15° 北 重複 4号・9号住居に壊される。 床面 やや起伏がある。 カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・須恵器壺身、石製模造品白玉、磁石 所見 須恵器壺身(4)はTK47併行期に位置づけられる。



第301図 12区23号住居出土遺物

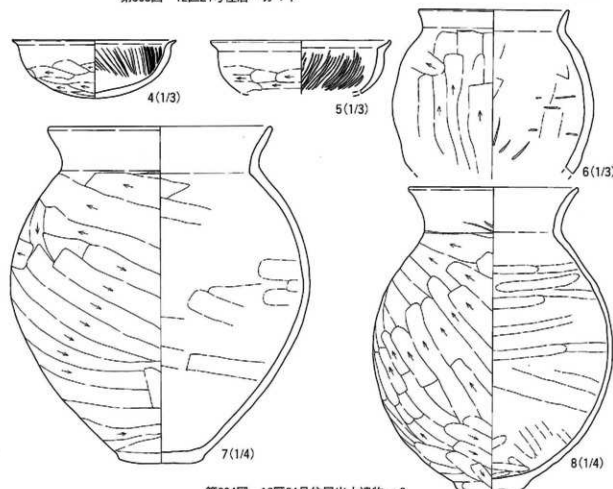
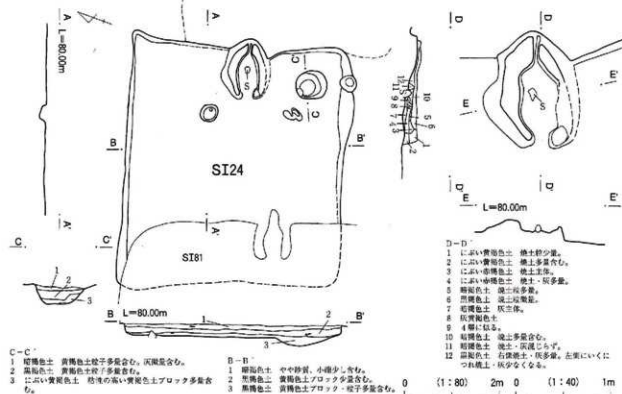
12区24号住居

位置 12区 規模形状 南北4.70m東西5.50m（推定）の長方形プランである。残存壁高は0.27m程度である。主軸方位 東-28°-北 重複 25号住居を掘り込み、18号住居に壊される。床面 やや起伏があるもののほぼ平坦である。貼床が確認される。カマド 東壁中央にある。奥行0.90m焚き口幅0.20m、煙道は0.30m残存している。カマド底面は奥に行くにつれ徐々に立ち上がる。燃焼部中央で支脚とみられる川原石を検出した。柱穴 東側の主柱穴を2基検出した。貯蔵穴 住居の南東隅で検出した。平面0.65m×0.58mの楕円形である。断面は縦やかな台形を呈する。その他付属施設 なし 遺物 土師器・瓦・瓶、石製模造品・銅・白土、蛇紋岩製勾玉（17）、石製紡錘車 所見 5世紀後半

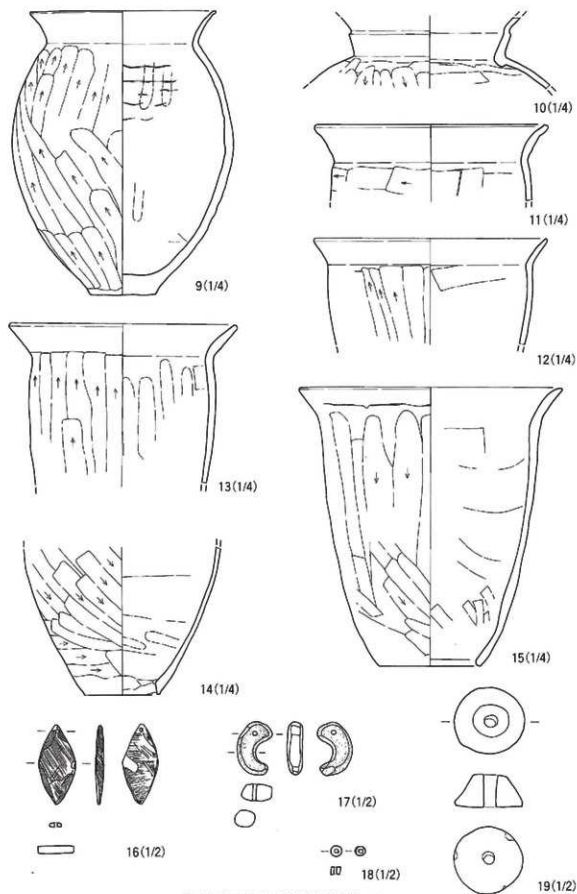


第302図 12区24号住居出土遺物-1

第1節 壁穴住居



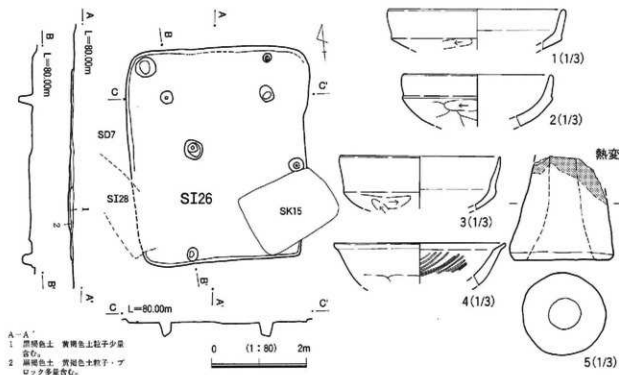
第304図 12区24号住居出土遺物-2



第305図 12区24号住居出土遺物-3

12区26号住居

位置 12区 規模形状 東西3.40m南北4.60mの規模で、隅丸長方形を呈する。主軸方位 北-1°-東 重複 27号・28号住居を掘り込む。15号土坑に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 不明 柱穴 主柱穴を7基検出した。貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器杯、碗の羽口 所見 6世紀前半備考 鍛冶関連遺物である碗の羽口が出土している。工房跡の可能性もある。ただし、羽口以外に鍛冶関連の遺構・遺物を検出しておらず、特定はむずかしい。

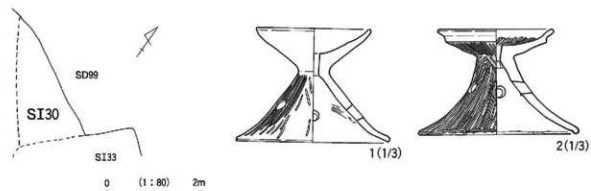


第306図 12区26号住居

第307図 12区26号住居出土遺物

12区30号住居

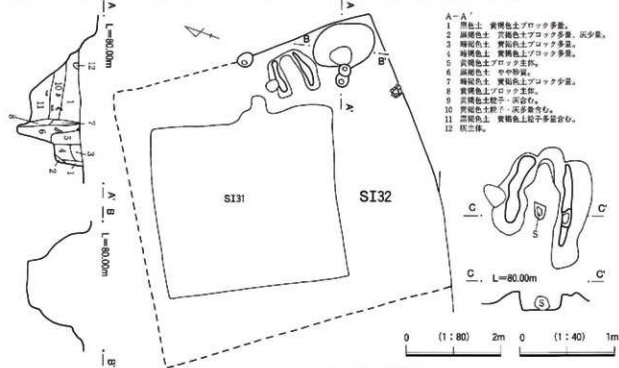
位置 12区 規模形状 住居の残りが悪く、西壁が直線的に走るのを捉えられた程度であり、形状・規模は不明である。主軸方位 重複 99号溝が埋没した後につくられる。33号住居に壊される。床面 不明。カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 不明 遺物 土師器器台 所見 古墳前期。



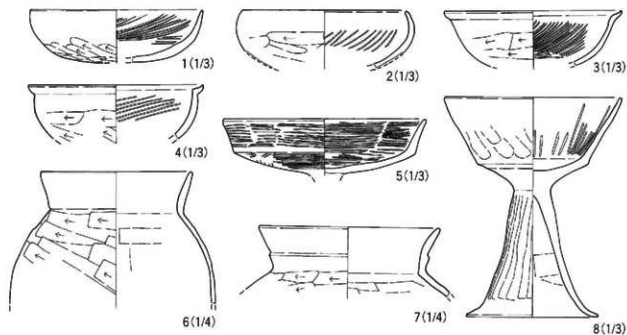
第308図 12区30号住居・出土遺物

12区32号住居

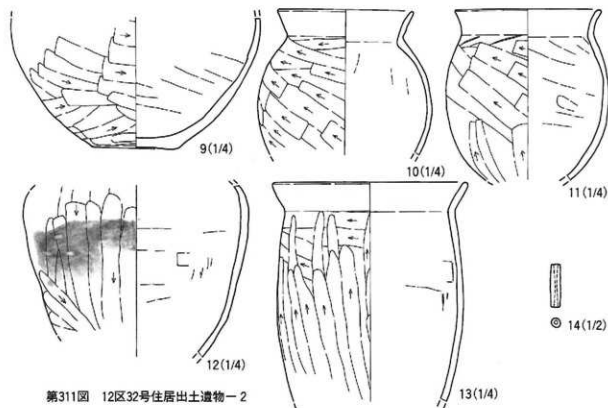
位置 12区 規模形状 南東コーナーで住居範囲を確認したが、ほかは推定である。カマドが残っていたので、それをよりに4～5m程度の方形プランが考えられる。主軸方位 不明 重複 31号住居に壊される。床面 ほぼ平坦である。カマド 住居東壁にある。奥行き1.10m 焚き口幅0.35m、燃焼部中央に支脚とみられる川原石がある。柱穴 不明 貯蔵穴 住居南東コーナーにある。平面は楕円形で長軸1.30m 短軸0.80m、深さ0.65m、断面はややいびつな台形を呈する。その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・杯、蛇紋岩製管玉、所見 6世紀前半 備考 土師器高杯の杯部が大型化し(5)、また長脚なものもある(8)。



第309図 12区32号住居・カマド



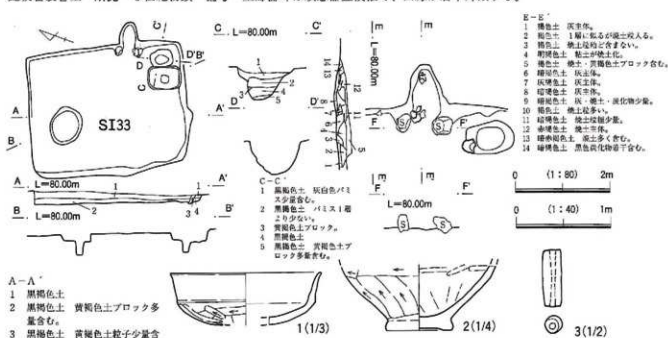
第310図 12区32号住居出土遺物-1



第311図 12区32号住居出土遺物-2

12区33号住居

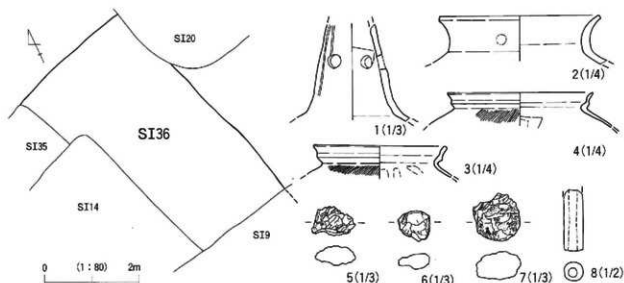
位置 12区 規模形状 東西2.70m南北3.30mの長方形プランである。残存壁高は0.18m程度である。主軸方位 東-30° 北 重複 30号住居を壊す。床面 やや起伏があるが、ほぼ平坦である。カマド 東壁中央やや南に位置する。柱穴 5基のピットがあるが、不規則な位置である。貯蔵穴 住居南東コーナーにある。0.60m×0.55mの平面楕円形である。深さは0.35mを測る。その他付属施設 なし。遺物 土師器壺・杯、蛇紋岩製管玉 所見 6世紀初頭 備考 土師器は須恵器蓋模倣で、口縁が若干外傾する。



第312図 12区33号住居・カマド・出土遺物

12区36号住居

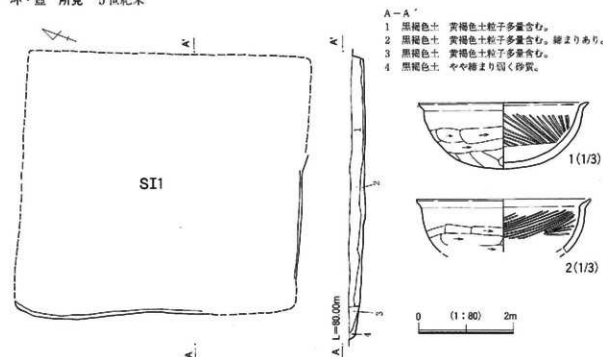
位置 12区 規模形状 北壁が直線的に伸びるのを捉えたのみであり、全体的なものは推定できない。主軸方位 東-32°-北 重複 9号・14号・20号・35号住居に壊される。床面 やや起伏がある。炉 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器S字壺・甕・高坏、埴輪質岩製管玉、鉄滓 所見 古墳前期



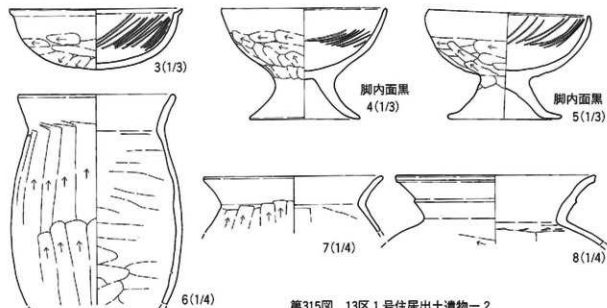
第313図 12区36号住居・出土遺物

13区1号住居

位置 13区 規模形状 東西5.50m南北5.90mのほぼ正方形プランを呈する。残存壁高は0.37mである。主軸方位 北-30°-西 重複 16区126号住居が埋没した後につくられる。床面 若干起伏はあるものの、ほぼ平坦である。カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器甕・坏・高坏・壺 所見 5世紀末



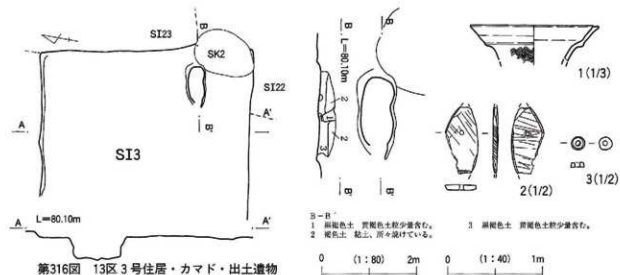
第314図 13区1号住居・出土遺物-1



第315図 13区1号住居出土遺物-2

13区3号住居

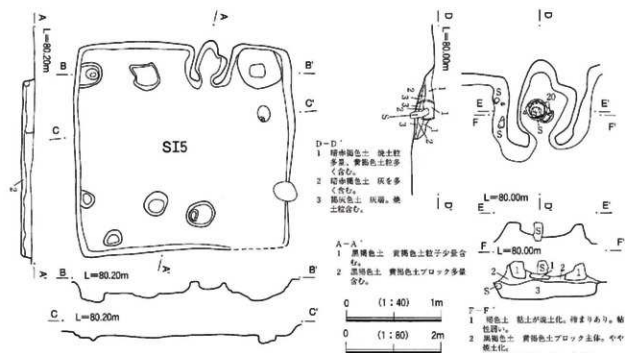
位置 13区 規模形状 南北4.40m東西3.00m+αの規模である。方形プランと考えられる。主軸方位 東-18°-北 重複 22号・23号住居を掘り込み、12号土坑に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 住居の南東隅にある。左袖のみ残存している。柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 須恵器ハソウ、石製模造品銅形・白玉 所見 5世紀後半。須恵器ハソウ(1)は口縁の破片である。頸部が細く、口縁端部がシャープである。



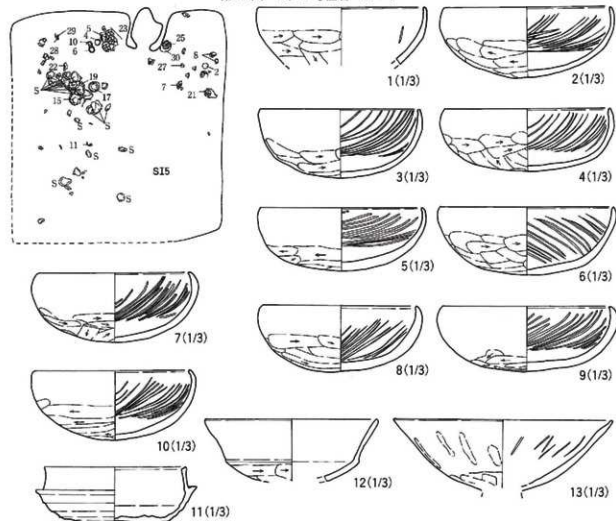
第316図 13区3号住居・カマド・出土遺物

13区5号住居

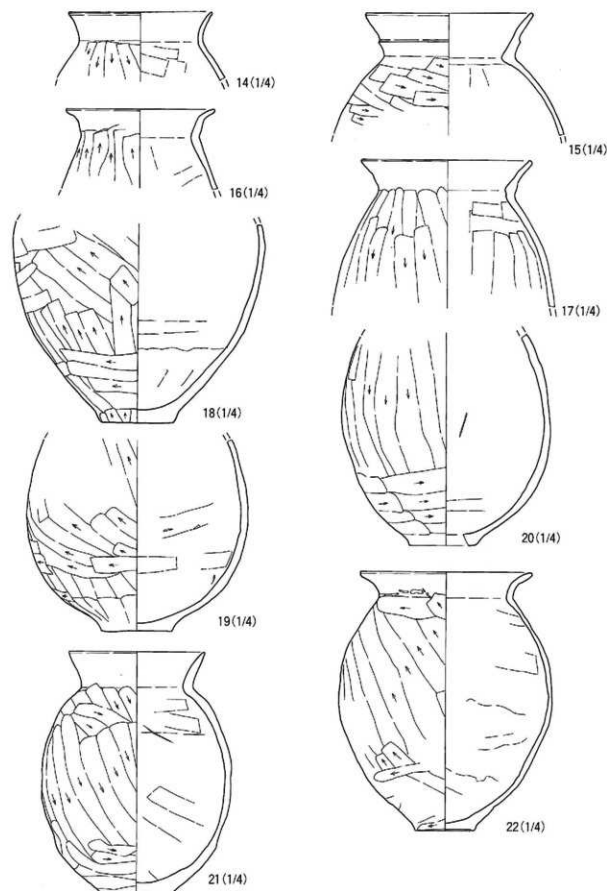
位置 13区 規模形状 東西4.5m南北4.6mの規模の正方形プランを呈する。残存壁高は0.18mである。主軸方位 東-19°-北 重複 22号・23号住居を壊す。床面 はほぼ平坦である。貼床が確認される。カマド 東側中央やや南に位置する。奥行1.10m焚き口幅0.25m。燃焼部の中央やや北寄りに、カマド底面に埋め込んだ石製の支脚を抽出。土師器の甕は壊れてはいるが底を下にした状態で支脚部分にあった。柱穴 7基のビットを検出した。しかし、企画性はない。貯蔵穴 南東コーナーにある。平面は楕円形で1.05m×0.95m、断面は緩やかなJの字形で深さ0.40mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器甕・坏・高坏、須恵器大型ハソウ(30)・坏身(11)・甕 所見 5世紀後半



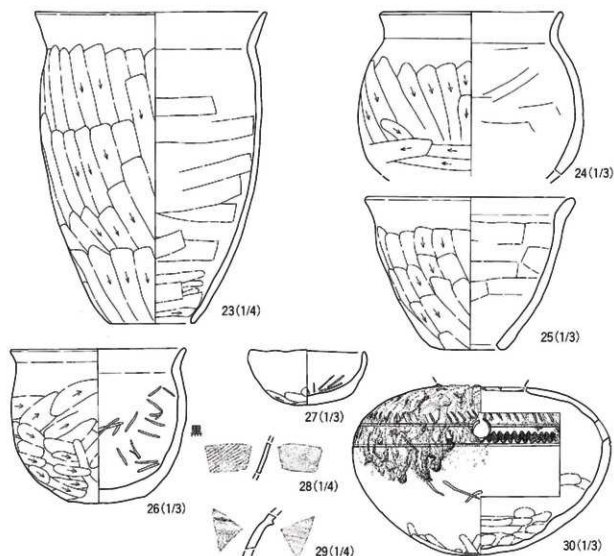
第317図 13区5号住居・カマド



第318図 13区5号住居遺物出土状況・出土遺物-1



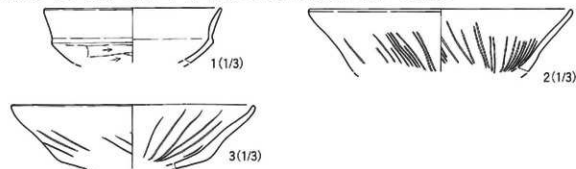
第319図 13区5号住居出土遺物-2



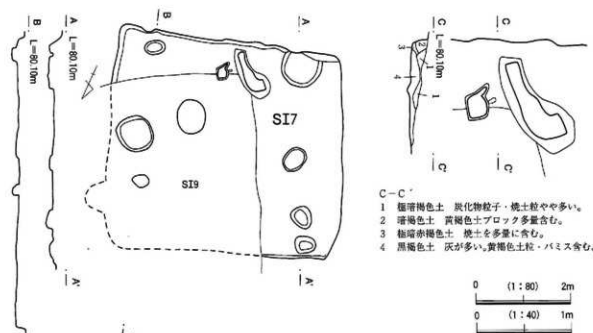
第320図 13区5号住居出土遺物-3

13区7号住居

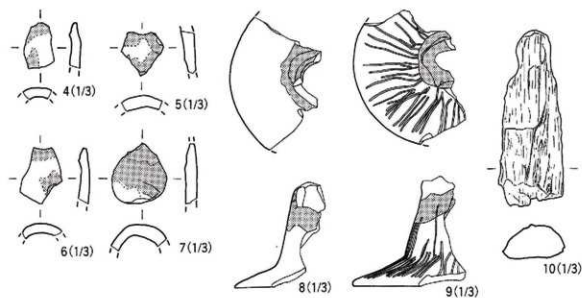
位置 13区 規模形状 東西4.80m南北4.50mの方形プランを呈する。残存壁高は0.07mである。主軸方位 東-20° 一北 重複 8号・23号住居を掘り込み、9号住居に壊される。床面 やや起伏が、ほぼ平坦である。カマド 南壁中央やや西にある。残存するのは右袖と燃焼部で、左袖は大部分ない。柱穴 6基の柱穴を検出した。南北に並ぶ傾向にある。貯蔵穴 南西隅にある。平面円形で0.85m×0.70m深さ0.06mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器・高坏、高坏転用羽口、薦堀石 所見 5世紀後半



第321図 13区7号住居出土遺物-1



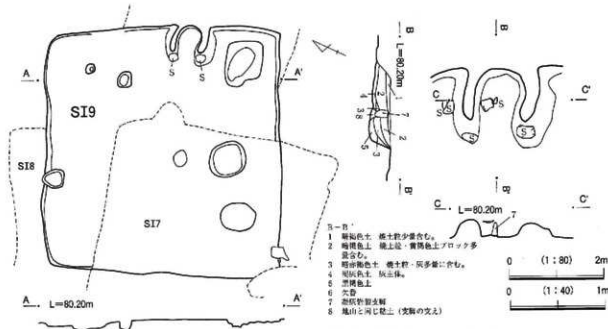
第322図 13区7号住居・カマド



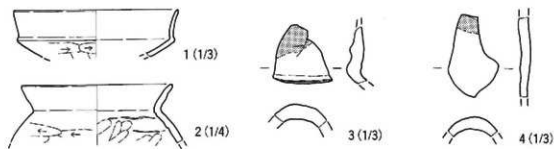
第323図 13区7号住居出土遺物-2

13区9号住居

位置 13区 規模形状 東西5.30m南北4.90mの方形プランを呈する。主軸方位 東-34° 一北 重複 7号・8号・11号・23号住居を壊す。床面 やや起伏があるが、ほぼ平坦である。貼床が確認される。カマド 東壁中央やや南にある。奥行0.80m突き口幅0.40m、両袖の先端は礎石で補強されている。燃焼部中央やや北で、長さ15cmほどの凝灰岩製の支脚を検出した。しかし、規則性はない。貯蔵穴 南東隅にある。平面はやや歪んだ長方形で、0.96m×0.80m深さ0.16mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器・高坏、高坏転用羽口 所見 5世紀末



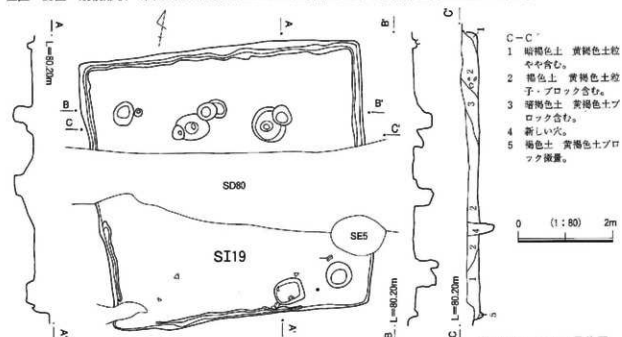
第324図 13区9号住居・カマド



第325図 13区9号住居出土遺物

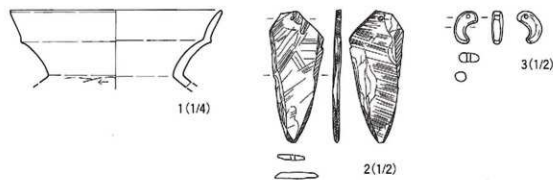
13区19号住居

位置 13区 規模形状 東西5.70m南北5.90mのはほぼ正方形を呈する。残存壁高は0.28mである。



第326図 13区19号住居

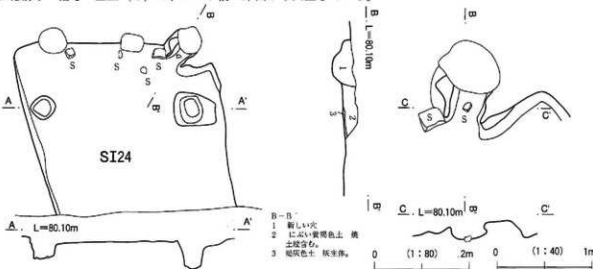
主軸方位 重複 16区78号・95号住居を掘り込み、5号・80号溝・5号井戸に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 不明、80号溝に壊された可能性が高い。柱穴 4基検出している。貯蔵穴 南東隅にある。平面0.55mの円形で深さ0.93mである。その他付属施設 壁際に壁周溝が巡る。幅5~15cm深さ5~15cm程度である。遺物 土師器・蛇紋岩製勾玉(3)、石製機造品刺針 所見 5世紀後半



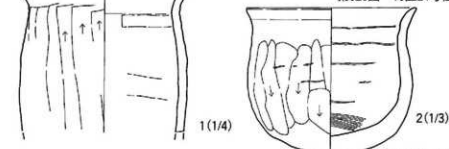
13区24号住居

第327図 13区19号住居出土遺物

位置 13区 規模形状 東西4.20m南北3.50m+aのゆがんだ方形プランである。残存壁高は0.26mである。主軸方位 北-27° 西 重複 22号住居を掘り込む、80号溝に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 北東コーナーにある。燃焼部は後世のビッドに壊され奥行は不明。右袖先端には、角張った砂岩製の袖石がある。焚き口幅は0.35mである。柱穴 壁際に3基検出した。貯蔵穴 カマドの南、東壁の中央の位置にある。平面台形で0.86m×0.70m、深さ0.58mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器・磁石、土玉 所見 6世紀前半 備考 土玉(4)は、カマド前の床面から出土している。



第328図 13区24号住居・カマド



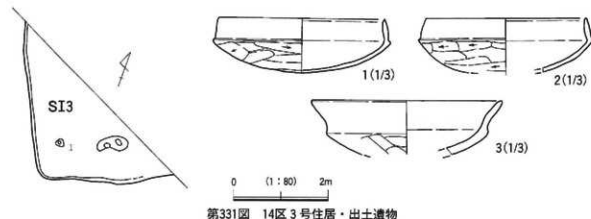
第329図 13区24号住居出土遺物-1



第330図 13区24号住居出土遺物-2

14区3号住居

位置 14区 規模と形状 住居の南西部を検出した。南北3.30m+ α 、東西2.80m+ α 、方形プランと推定される。残存壁高は0.10m程度である。主軸方位 北-25°-西 重複 14区2号住・12号溝を掘り込む。床面 黒褐色と黄褐色の混土で貼床としている。カマド 不明 柱穴 確実な柱穴は1基検出したにすぎない。柱穴 1 長軸0.30m、短軸0.21m、深さ0.15m 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・坏 所見 6世紀中頃 備考 土師器坏は、須恵器の蓋坏と坏身模倣のものがある。蓋坏模倣(3)のは、口縁が大きく外反し口径が15.0cmと大きい。坏身模倣(1・2)のは、口縁が立ち気味で器内が僅分薄く体部がやや深い。つまり丁家である。

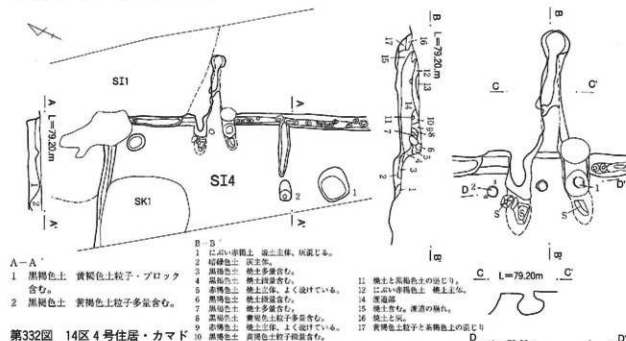


第331図 14区3号住居・出土遺物

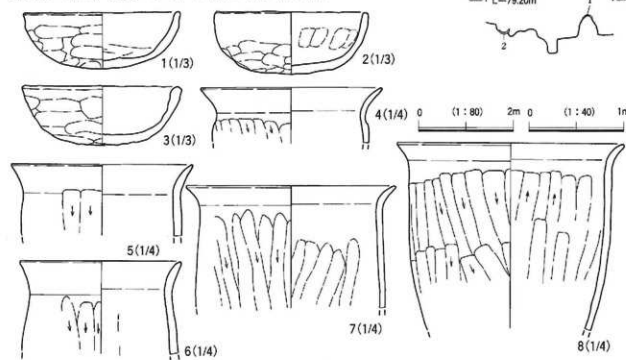
14区4号住居

位置 14区 規模形状 長辺5.80m+ α 、短辺2.80m+ α 、方形プランと推定される。残存壁高14.025mである。主軸方位 北-35°-東 重複 14区1号住を掘り込み、14区1号土坑に壊される。床面 黒褐色土と黄褐色土からなる貼床が確認される。カマド 北横中央部やや西に位置する。奥行1.20m、焚き口幅0.5m(推定)、煙道長0.85mを測る。袖先端は削平され、また東軸は円形の小ピットによって一部壊されている。凝灰岩を袖石とし、袖は粘土で構築される。燃焼部は粘土でつくられた部分と土を削りこんだ部分とからなる。燃焼面は床面より僅かに低く、煙道は地山を水平に掘って造られている。柱穴 2 基検出している。柱穴1 長軸0.64m、短軸0.60m、深さ0.17m 柱穴2 直径0.22m、深さ0.11m 貯蔵穴 不明 その他付属施設 カマド部分を削いで壁周溝を検出した。幅0.20-0.30m深さ0.05m程度である。また、柱穴2と北壁を結ぶ間仕切りと考えられる幅0.20mほどの溝を検出した。遺物 土師器壺・瓶、小形粗製土器坏 所見 6世紀前半

備考 土師器壺は長胴で、底はかなり大型である。小型粗製土器坏は、表面が凸凹でありつくりも粗雑である。祭祀的要素をもつ土器と考えられる。



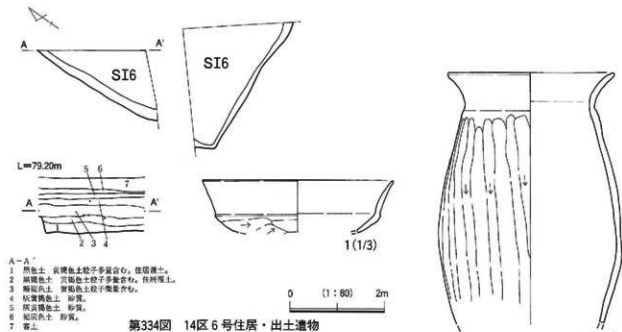
第332図 14区4号住居・カマド



第333図 14区4号住居出土遺物

14区6号住居

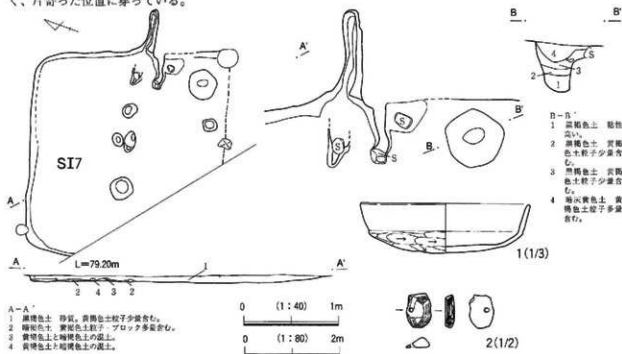
位置 14区 規模形状 住居の南東隅を調査した。南北4.10m+ α 、東西3.20m+ α 、方形プランと推定される。残存壁高は0.40mほどである。主軸方位 北-45°-西 重複 14区10号溝を掘り込む。床面 多少の凹凸は見られるが、ほぼ平坦である。カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・坏 所見 6世紀後半 備考 土師器壺は長胴で、側面幅は中位にある。土師器坏は須恵器蓋坏模倣で口縁が外反し、口径15.0cmとやや大型である。



第334図 14区 6号住居・出土遺物

14区 7号住居

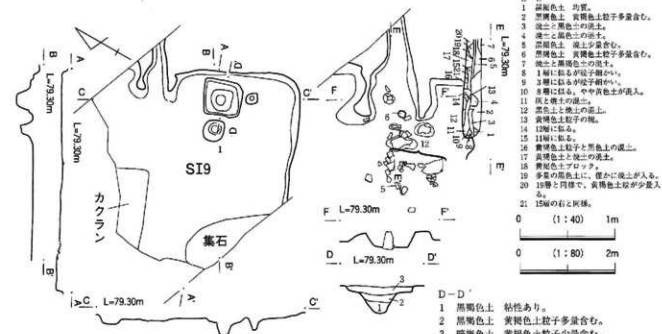
位置 14区 規模形状 ほぼ正方形を呈し、長辺4.30m、短辺4.10+ α m、残存壁高0.14mを測る。主軸方位東-22°-北 重復 なし 床面 平坦面を形成している。カマド 東壁中央部に位置する。奥行1.70m、焚き口幅0.32m、煙道部長0.90mを測る。燃焼部の一部はピットによって壊されている。暗褐色土を含む粘性の土に、黄褐色土で構築され、両袖先端部に凝灰岩製の柱石がある。掘道部は残りが良好で住居壁の外側に地山を掘り造っている。柱穴 不明 貯蔵穴 南東隅に位置する。円形を呈し、長軸0.62m、短軸0.60m、深さ0.51mを測る。その他付属施設 なし 遺物 土師器片、石製模造品白玉 所見 6世紀後半 備考 土師器片は須恵器蓋模倣である。やや口縁が外傾する。石製模造品の白玉は、やや粗雑なつくりで孔も中心部ではなく、片寄った位置に穿っている。



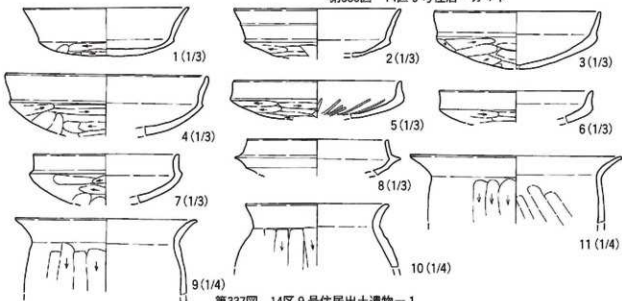
第335図 14区 7号住居・カマド・貯穴・出土遺物

14区 9号住居

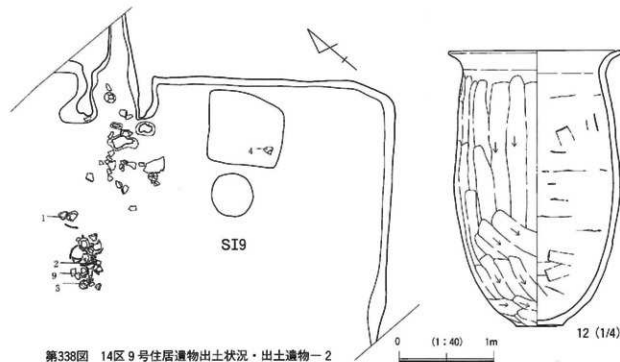
位置 14区 規模形状 長辺3.60m+ α 、短辺2.80m+ α 、方形プランと推定される。残存壁高0.14mを測る。主軸方位 東-43°-北 重復 集石遺構に壊される。床面 ほぼ平坦である。カマド 東壁中央に位置する。左袖が一部崩れる。奥行1.10m+ α 、焚き口幅0.45mを測る。燃焼部は粘土で構築した部分と住居壁を削り出した部分とからなる。燃焼面は床面とほぼ同レベルである。燃焼部中央やや右で砂岩製の支脚を検出した。また焚き口手前では、土師器の蓋の破片が多数出土した。柱穴 主柱穴を1基検出している。柱穴1 長軸0.50m、短軸0.46m、深さ0.27m、他に補助柱穴がある。貯蔵穴 カマド右脇にある。方形プランを呈し、長軸0.80m、短軸0.75m、深さ0.38mを測る。その他付属施設 なし 遺物 土師器片、土師器器身 所見 6世紀後半 備考 土師器片は、長柄で口縁が大きく外反する。口は口径11cm程度と小ぶりなものと、13~14cmと中形のものの、口径16.0cmと大形のものまでバリエーションがある。また、須恵器蓋の模倣で、口縁に段をもつ有段口縁杯もある。須恵器器身(8)は立ち上がり部径11.0cm、受部径13.0cmとやや小ぶりである。



第336図 14区 9号住居・カマド



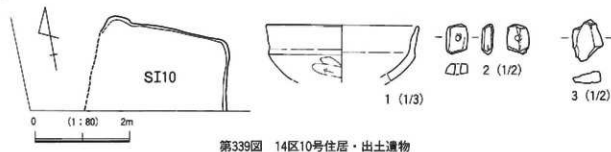
第337図 14区 9号住居出土遺物-1



第338図 14区9号住居遺構出土状況・出土遺物-2

14区10号住居

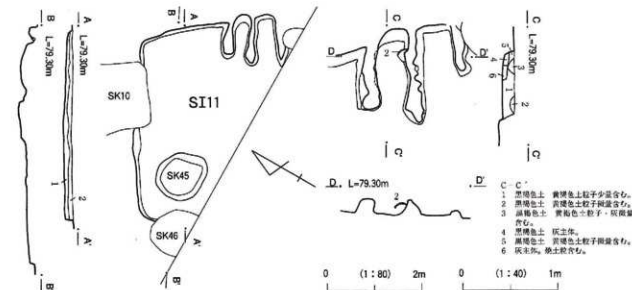
位置 14区 規模形状 住居の南半分以上が調査区外である。長辺 (3.90m推定)、短辺1.90m + a、方形プランと推定される。残存壁高0.12mを測る。主軸方位 西-10° 北 重複 なし 床面 多少の起伏がみられる。カマド 不明 柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器甕・坏、石製模造品白玉未製品 所見 6世紀後半 備考 石製模造品が出土しているが、完成品はなく、未製品と滑石片のみである。



第339図 14区10号住居・出土遺物

14区11号住居

位置 14区 規模形状 東西3.90m、南北2.80m + a、方形プランと推定される。残存壁高0.16mを測る。主軸方位 東-25° 北 重複 14区10号・44号・45号・46号土坑に横される。床面 全体的に平坦である。カマド 東壁中央付近に位置する。袖が3本あり、造り替えもしくは2つのカマドが並ぶと考えられる。後者とすると、奥行は左から1.00m、1.05m、焚き口幅は左が0.25m、右が0.35mである。カマドは小石混じりの粘土で構築される。燃焼面は住居床面とはほぼ同レベルで、奥で急激に立ち上がる。燃焼部内から焚き口前に灰が大量に堆積しており、また中央の袖の下にも灰が入り込んでいる。よって、中央の袖で構成される左側のカマドは一段階新しいと考えられる。柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器甕・坏 所見 6世紀後半 備考 土師器坏は、須恵器甕模倣 (2) と坏身模倣 (1) のものがあるが、口径11.2cm-12.0cmと小型である。

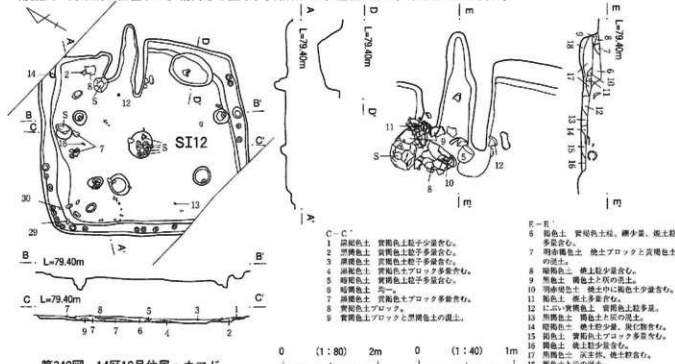


第340図 14区11号住居・カマド

第341図 14区11号住居出土遺物

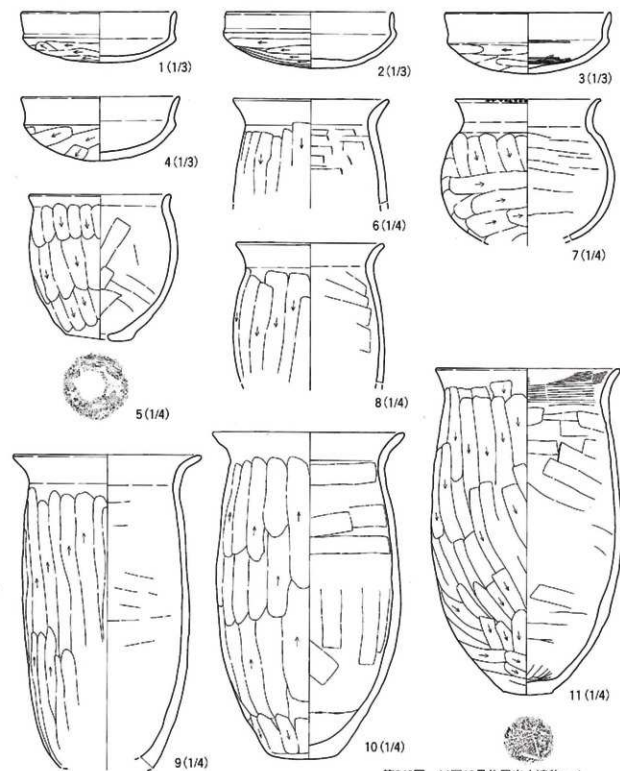
14区12号住居

位置 14区 規模形状 1辺が4.20mの正方形プランを呈する。残存壁高は0.12mである。主軸方位 東-34° 北 重複 47号土坑と重複している。床面 黄褐色土粒を含む黒褐色土で貼床としている。カマド 東壁はほぼ中央に位置する。奥行1.52m、焚き口幅0.50mを測る。左袖先端部の袖石は凝灰岩である。燃焼面は床面とはほぼ同レベルである。燃焼部内から土師器甕1個体、瓶1個体が出土した。柱穴 7基検出している。貯蔵穴 南東隅に位置する。楕円形を呈し、長軸0.94m、短軸0.65m、深さ0.25mを測る。

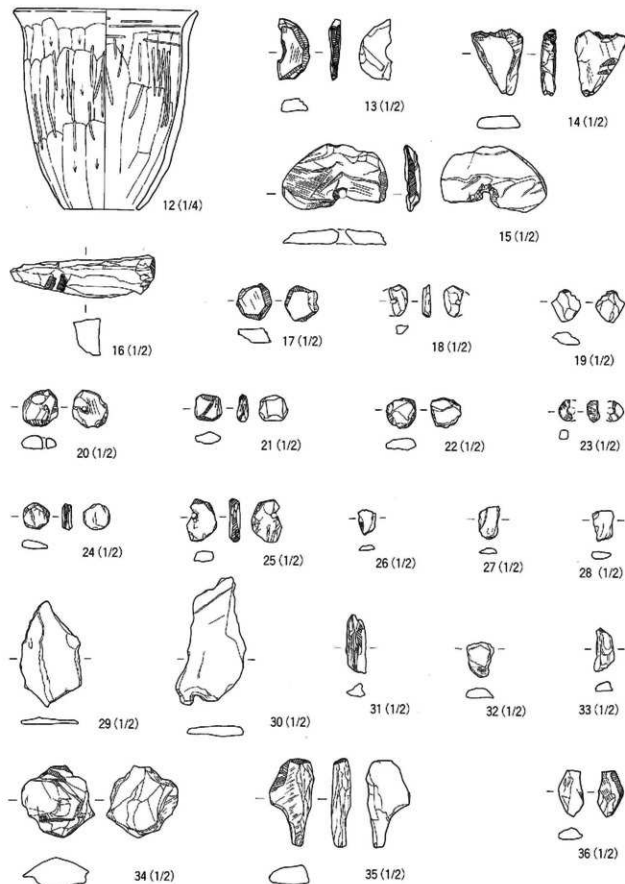


第342図 14区12号住居・カマド

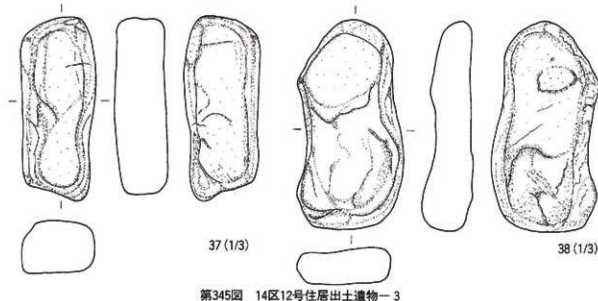
その他付属施設 カマド部分を除く壁際は一段高くなっている。この部分に小ピットが多数ある。 遺物 土師器 甕・瓶・杯、石製模造品有孔円板・刀子、剣形・勾玉・白玉未製品、滑石片 所見 6世紀後半 備考 この住居では滑石の剥片が多量に、また石製模造品白玉・有孔円板・刀子の未製品と滑石片も出土した。総重量は229gである。製品を削ったり磨いたりした時出たと見られる滑石粉の存在も確認されており、石製模造品を製作していた可能性がある。



第343図 14区12号住居出土遺物-1



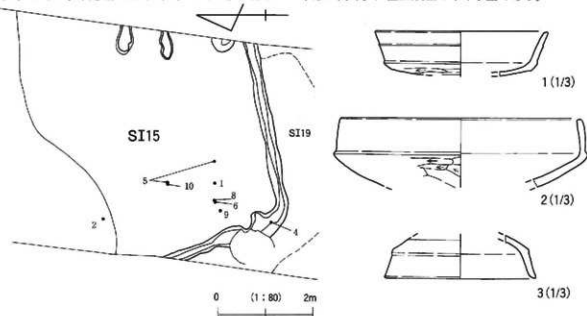
第344図 14区12号住居出土遺物-2



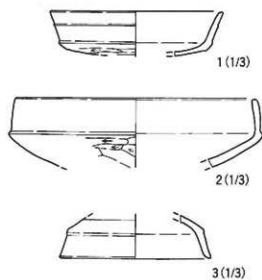
第345図 14区12号住居出土遺物—3

14区15号住居

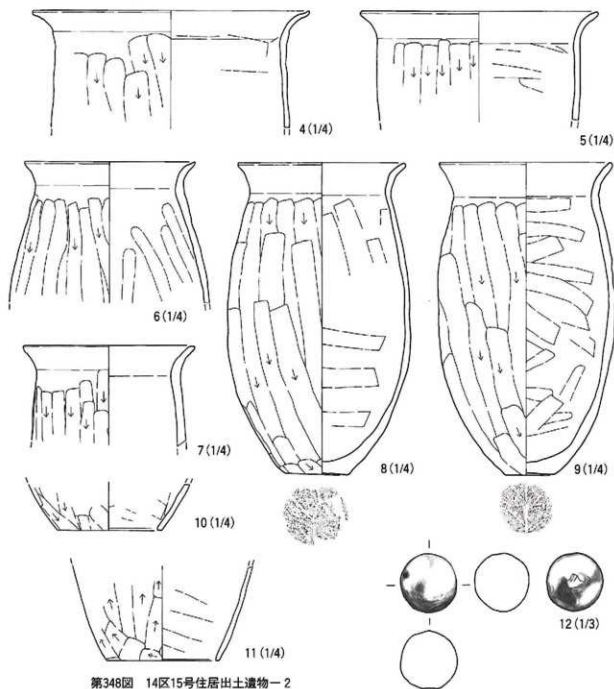
位置 14区 規模形状 東西4.21m + a、南北2.60m + a、方形プランと推定される。残存壁高は0.20mである。主軸方位 東-8°-南 重様 14区19号住居を掘り込む。14区8号溝に壊される。床面 粘性が高い黒色土で、厚さ0.05~0.10mの貼床としている。カマド 東壁中央部よりやや南側に位置する。カマド本体は調査区外で、袖の一部が見えている。焚き口幅は0.60mである。柱穴 不明 貯蔵穴 東半分は調査区外である。検出できたプランから推定すると、直径0.60m程度である。その他付属施設 カマド部分を除く住居検出内全周で壕溝溝を検出した。幅0.20~0.30m、深さ0.05~0.10m程度である。遺物 土師器壺・杯・甗、須恵器蓋環、性格不明球形土製品 所見 6世紀中頃 備考 土師器壺は長胴で、やや下膨れである。口縁が大きく外反する。甗は底の無いタイプであり、かなり大型である。土師器杯は、須恵器杯身模倣で、口径19.0cmという超大型品(2)がある。須恵器は蓋環(3)がある。口縁がハの字形に開く。口径12.0cmとやや小型である。



第346図 14区15号住居



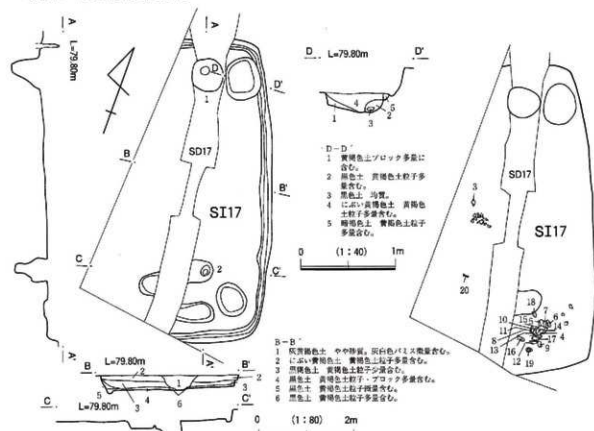
第347図 14区15号住居出土遺物—1



第348図 14区15号住居出土遺物—2

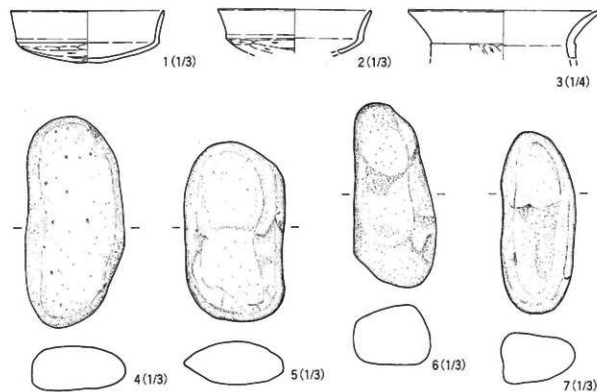
14区17号住居

位置 14区 規模形状 長辺6.30m、短辺1.70m + a、方形プランと推定される。残存壁高は0.10mを測る。主軸方位 北-14°-西 重様 14区37号土坑、14区17号溝に壊される。床面 黄褐色土粒を含む黒色土で厚さ0.05m前後の貼床としている。カマド 不明 柱穴 2基検出している。柱穴1 長軸0.68m、短軸0.62m、深さ0.61m 柱穴2 長軸0.54m + a、短軸0.50m、深さ0.68m 貯蔵穴 住居北東に位置する。楕円形プランを呈し、長軸0.90m、短軸0.70m、深さ0.20mである。その他付属施設 壕溝溝を検出した。幅0.20m前後、深さ0.05m前後である。遺物 土師器壺・杯、黒曜石 所見 6世紀末 備考 土師器杯は長胴と考えられるが、頸部がやや細く口縁が外に向かって大きく外反する特徴をもつ。土師器杯の模倣で口縁がやや外傾し、口径12.0cmほどとやや小型である。焼きは良好で褐色、やや軟質である。

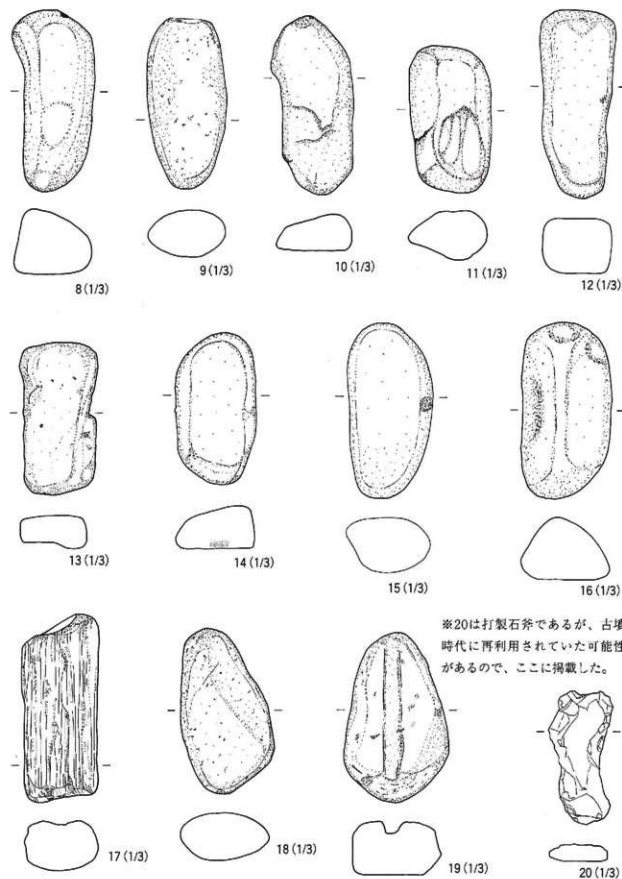


第349図 14区17号住居

第350図 14区17号住居遺物出土状況



第351図 14区17号住居出土遺物一1

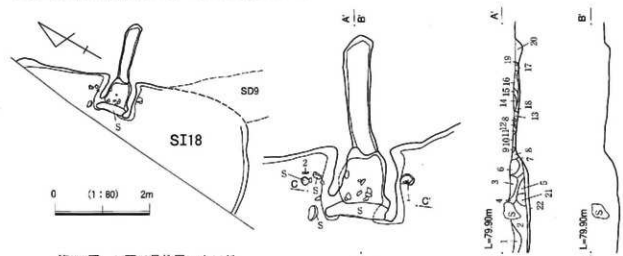


※20は打製石斧であるが、古墳時代に再利用されていた可能性があるため、ここに掲載した。

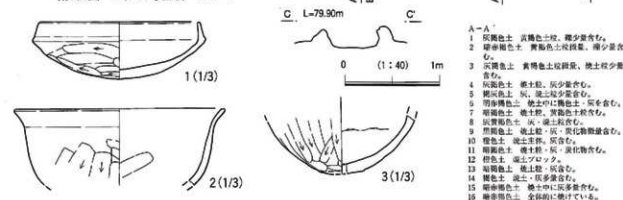
第352図 14区17号住居出土遺物一2

14区18号住居

位置 14区 規模形状 長辺5.00m+a、短辺2.00m+a、方形プランと推定される。残存壁高0.34mを測る。主軸方位 東-13°-北 重複 14区9号溝が埋没した後に造られる。床面 褐色土を主体とし、厚さ0.05~0.10mの貼土としている。カマド 東壁は中央部に位置する。奥行0.70m、焚き口幅0.35m、煙道部1.25mを測る。阿袖の先端には、凝灰岩製の長さ0.65m、幅0.20m程度の天井石がのっている。焼面は住居床面より若干低く、カマド奥で立ち上がり、煙道は水平に延びている。柱穴 不明 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器甕・鉢・杯 所見 6世紀後半 備考 住居中央、調査区の壁の近くで、長さ0.70m幅0.20mほどの範囲に滑石粉が検出された。この住居は滑石片や石製模造品の未製品はないが、未調査な部分が多い遺構であるため、石製模造品の工場の可能性も考えられる。



第353図 14区18号住居・カマド

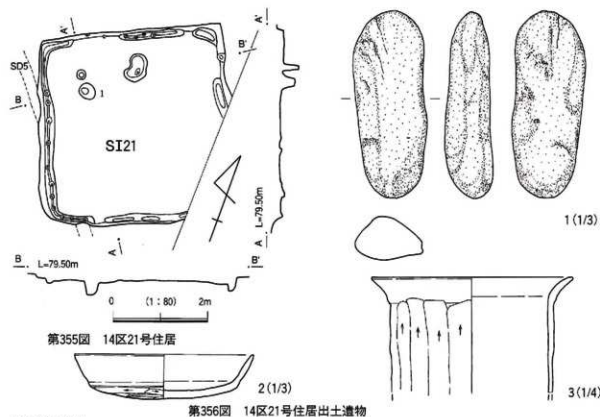


第354図 14区18号住居出土遺物

14区21号住居

位置 14区 規模形状 東西4.12m、南北3.95m、の正方形プランを呈する。残存壁高0.16mである。主軸方位 北-18°-西 重複 14区5号溝を壊す。床面 多少の起伏はあるが、ほぼ平坦面である。カマド 不明。調査区外の南東部にある可能性もある。柱穴 1基検出している。柱穴1 長軸0.38m、短軸0.30m、深さ0.30m 貯蔵穴 不明 その他付属施設 南壁、西壁側で壁周溝を検出した。北壁、東壁でも部分的だが検出した。幅0.20m前後、深さ0.05m前後である。周溝内から小ビットが多数検出した。遺物 土師器甕・杯・麻織石 所見 6世紀後半 備考 土師器甕は胴部が丸く器肉が厚いタイプが出土している。小型甕は全体が球に近い形をしており、口縁が小さく外傾する。土師器杯は須恵器杯身の模倣で、口縁がハの字形に外傾し体部は浅い。

第1節 貯穴住居

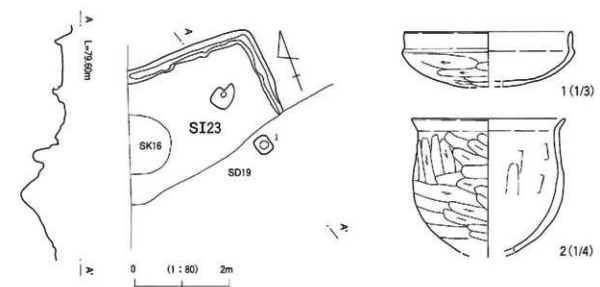


第355図 14区21号住居

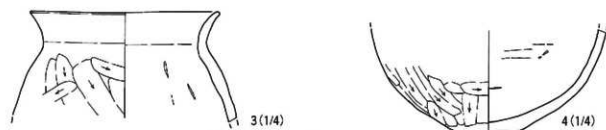
第356図 14区21号住居出土遺物

14区23号住居

位置 14区 規模形状 長辺2.60m+a、短辺2.00m+a、残存壁高0.18mを測る。北壁、東壁の一部が残存する。方形プランと推定される。主軸方位 東-12°-北 重複 14区25号住居、16号土坑、19号溝に壊される。床面 地山黄褐色土粒を含む黒褐色土で部分的に貼土としている。カマド 不明 柱穴 1基検出している。柱穴1 長軸0.48m、短軸0.34m、深さ0.26m 貯蔵穴 不明 その他付属施設 壁周溝を検出した。幅0.20~0.30m深さ0.10m前後である。遺物 土師器甕・杯 所見 6世紀中頃 備考 甕は胴部が丸く器肉が厚いタイプが出土している。小型甕は全体が球に近い形をしており、口縁が小さく外傾する。土師器杯は須恵器杯身の模倣(1)で、体部が深く口径13.0cmと中型である。



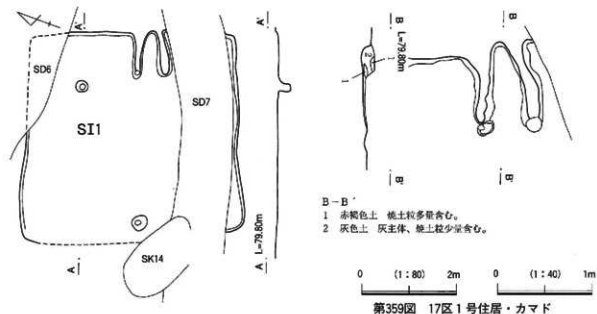
第357図 14区23号住居・出土遺物-1



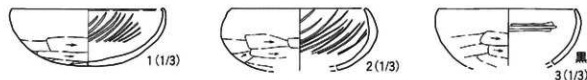
第358図 14区23号住居出土遺物-2

17区1号住居

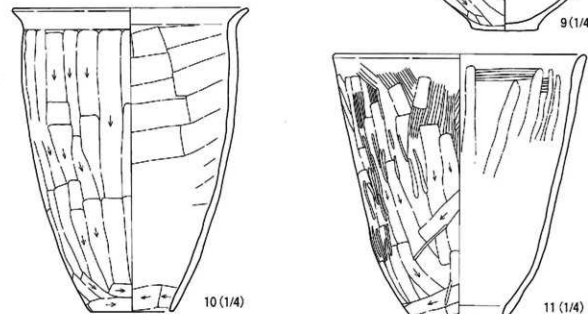
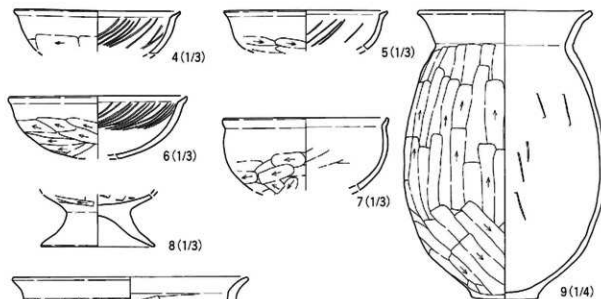
位置 17区 規模形状 長辺4.70m、短辺4.20mの方形プランを呈する。残存壁高は0.18mである。主軸方位 東-28°-北 重複 17区2号住居を掘り込む。17区6号・7号溝、17区14号土坑に壊される。床面 白色粘土を含む黒褐色土で、厚さ0.10~0.20mの貼床としている。カマド 東壁中央やや南側に位置する。奥行0.95m、焚き口幅0.35mを測る。両袖の先端には粘土塊を袖石がわりにした袖強材がある。燃焼部中央やや左側には支脚痕と思われる小さな窪みを検出した。柱穴 主柱穴を2基検出している。貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器甕・瓶・杯・高坏 所見 5世紀第4四半期 備考 土師器甕は胴部が丸みをもつもののやや長胴化している。瓶は無底式で大形である。口縁はくびれがないものと、小さく外反するものがある。前者はハケ、ヘラケズリ、ヘラミガキとかなり丁寧な調整をしている。土師器杯は内斜口縁と内湾口縁のタイプがあり、小型と中型とがある。高坏は小さな脚がつくタイプである。須恵器模倣の杯はない。中国製白磁が見つかるが、住居を壊す新しい遺構からの出土である (p349掲載)。



第359図 17区1号住居・カマド



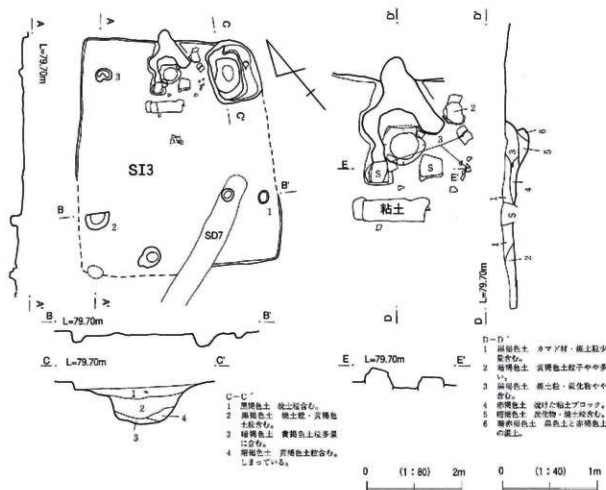
第360図 17区1号住居出土遺物-1



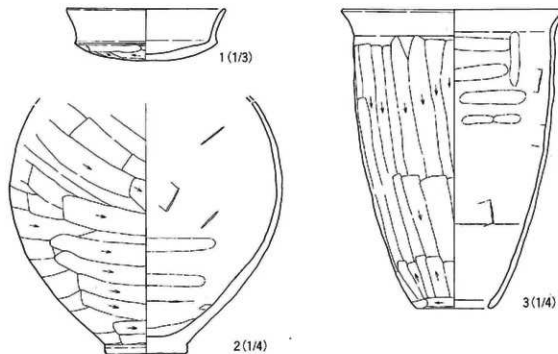
第361図 17区1号住居出土遺物-2

17区3号住居

位置 17区 規模形状 長辺4.80m、短辺3.80mの長方形プランを呈する。残存壁高は0.10mである。主軸方位 北-39°-東 重複 17区4号住居を掘り込む。17区7号溝に壊される。床面 貼床が認められる。ほぼ平坦である。カマド 北壁ほぼ中央に位置する。奥行0.80m、焚き口幅0.33mを測る。袖の先端は凝灰岩の袖石で、カマド南に天井材と見られる長さ0.90mほどの細長い凝灰岩を検出した。柱穴 主柱穴を3基検出した。北東部の柱穴は確認できなかった。柱穴1 長軸0.28m、短軸0.20m、深さ0.12m 柱穴2 長軸0.48m、短軸0.34m、深さ0.13m 柱穴3 長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.08m 貯蔵穴 北東隅に位置する。長方形プランを呈し、長軸1.20m、短軸1.00m、深さ0.47mを測る。その他付属施設 なし 遺物 土師器甕・瓶・杯 所見 6世紀初葉 備考 土師器甕は胴部が丸く磁に近い形をしている。瓶は大形で胴が長く、口縁が小さく外反する。杯は盃形模倣である。口縁がやや外反して体部は浅い。



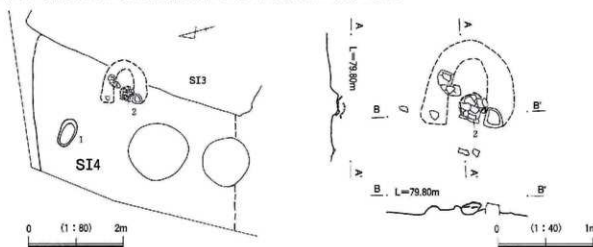
第362図 17区3号住居・カマド



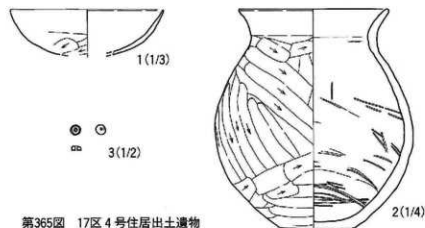
第363図 17区3号住居出土遺物

17区4号住居

位置 17区 規模形状 南北4.30m、東西2.80m $\pm$ a、方形プランを呈すると推定される。残存壁高0.08mを測る。主軸方位 東-13° 一市 重複 17区3号住居に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 東壁中央部に位置する。大部分が崩れ残りは悪い。右袖の先端部分に凝灰岩製の袖石を出土した。柱穴 北側で1基検出している。柱穴1 長軸0.34m、短軸0.32m、深さ0.38m 貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・坏、石製模造品白玉 所見 5世紀後半 備考 カマド中央燃焼部付近から壺が出土している。土師器壺は球形で器内が厚くやや下膨れである。土師器坏は内寄口縁のタイプであるが、内面の暗文はない。また、口縁がやや開き気味である。石製模造品の白玉は直径0.5cmと小型である。



第364図 17区4号住居・カマド

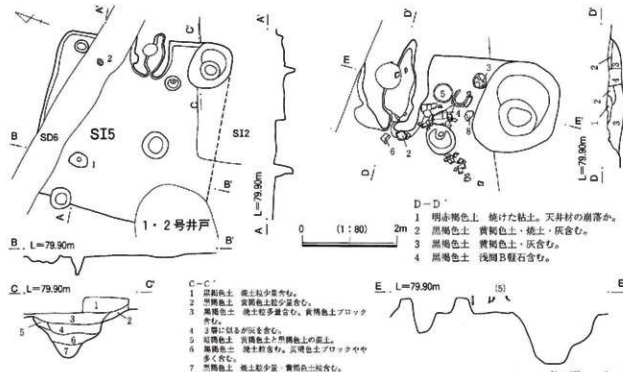


第365図 17区4号住居出土遺物

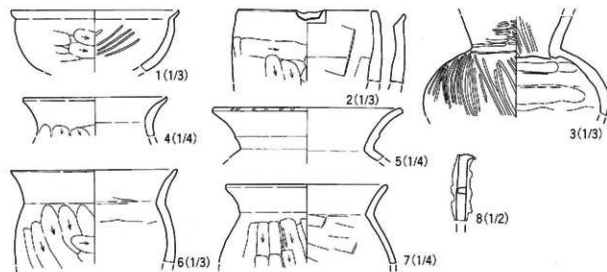
17区5号住居

位置 17区 規模形状 一辺3.80mの正方形プランを呈する。残存壁高0.12mを測る。主軸方位 東-12° 一市 重複 17区2号住居、6号溝、1号・2号井戸に壊される。床面 はほぼ平坦面を形成している。カマド 東壁中央やや市に位置する。奥行1.0m、焚き口幅0.30mを測る。柱穴 2基検出している。柱穴1 長軸0.40m、短軸0.30m、深さ0.40m 柱穴2 長軸0.10m、短軸0.10、深さ0.02m (17区6号溝部分から検出) 貯蔵穴 南東隅に位置する。楕円形を呈し、長軸0.98m、短軸0.80m、深さ0.63mを測る。その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・壺・埴・片口(2)・坏、鉄釘 所見 5世紀後半 備考 土師器の壺は球形である。壺は口縁の中途に段をもち、口縁端部が赤色に塗彩されている(5)。

第IV章 古墳時代の遺構と遺物



第366図 17区5号住居・カマド



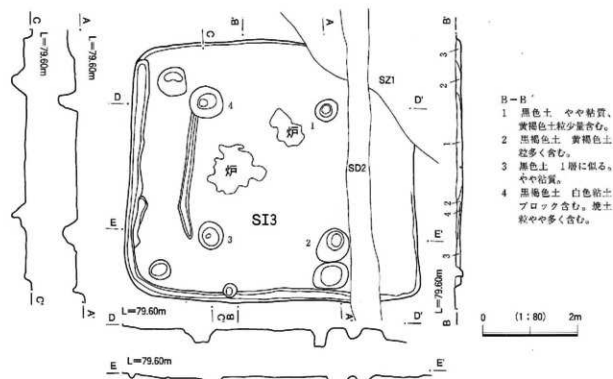
第367図 17区5号住居出土遺物

18区3号住居

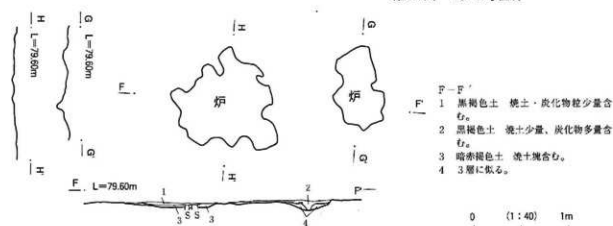
位置 18区 規模形状 東西6.00m、南北5.50mの隅丸方形プランを呈する。残存壁高は0.10m程度である。主軸方位 東-11°-北 重複 3号古墳の周堀に接される。床面 はほぼ平坦である。炉 住居中央部に2基の炉跡が検出された。そこには、炭化材や焼土が散在していた。両方の炉とも範囲は明確ではないが、炉A(西)が直径1.0m、深さ0.05m、B(東)は1.0m×0.5m、深さ0.10m程度と推定される。炉Aの底には川原石が2点置いてあった。柱穴 四隅で主柱穴が4基検出している。柱穴1 径0.48m、深さ0.38m、柱穴2 長軸0.70m、短軸0.58m、深さ0.29m 柱穴3 長軸0.52m、短軸0.50m、深さ0.28m 柱穴4 長軸0.64m、短軸0.60m、深さ0.28m 貯蔵穴 南東の柱穴南に位置する。楕円形プランを呈し、長軸0.72m、短軸0.50m、深さ

第1節 竪穴住居

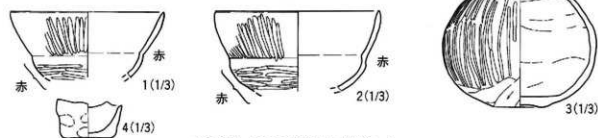
0.30mを測る。その他付属施設 南壁、西壁際で壁周溝を検出した。幅0.10~0.20m、深さ0.03~0.05mである。また、西側の2基の柱穴を結ぶ形で幅0.15mほどの溝が掘られている。住居内の間仕切りの可能性がある。遺物 土師器壺・小型丸底甕・台付甕・S字蓋、鉄洋 所見 古墳前期



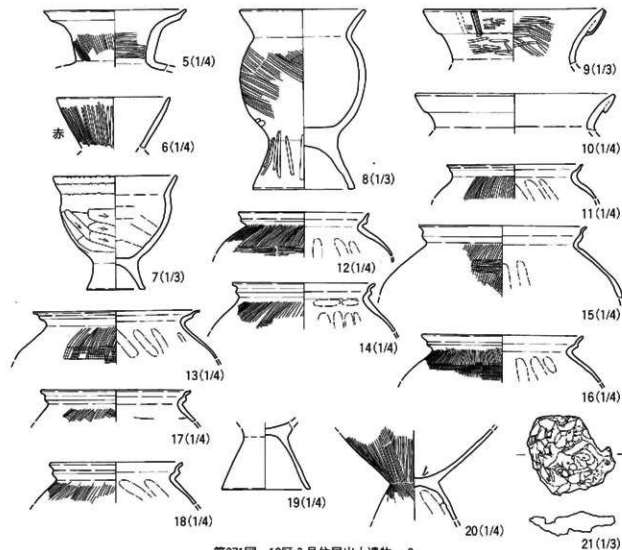
第368図 18区3号住居



第369図 18区3号住居炉



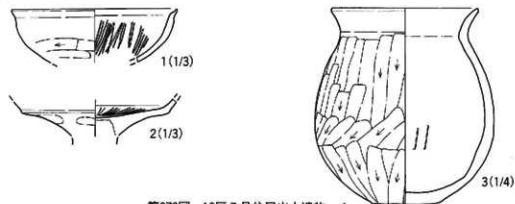
第370図 18区3号住居出土遺物-1



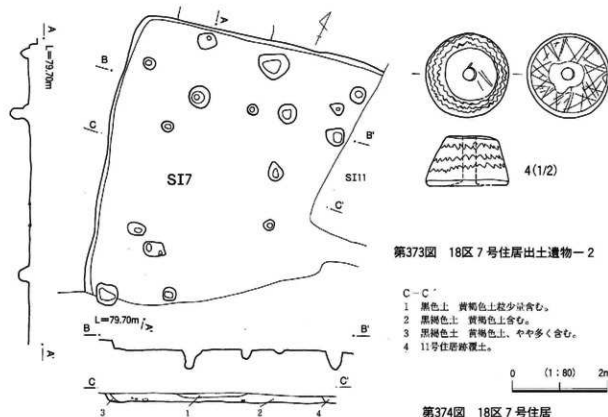
第371図 18区3号住居出土遺物—2

18区7号住居

位置 18区 規模形状 東西6.50m、南北5.00m+ α 、方形プランと考えられる。残存壁高は0.20m程度である。
主軸方位 北-12°-西 重複 18区23号土坑を掘り込み、18区11号住居、7号溝に壊される。床面 平坦面を形成している。カマド 不明 柱穴 主柱穴が3基検出された。南西の柱穴は7号溝に壊されていると考えられる。貯蔵穴 不明 その他付属施設 なし 遺物 土師器・高杯・壺、石製紡錘車、鉄釘所見 5世紀後半 備考 石製紡錘車は滑石製で、文様が線刻されている。



第372図 18区7号住居出土遺物—1



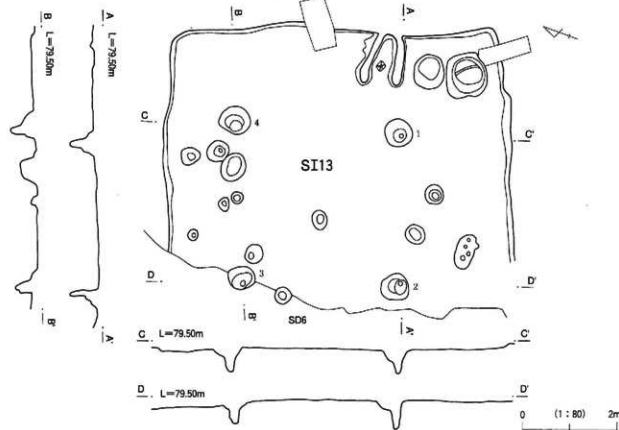
第373図 18区7号住居出土遺物—2

- C-C'
- 1 黒色土 黄褐色土粒少を含む。
 - 2 黒褐色土 黄褐色土を含む。
 - 3 赤褐色土 黄褐色土、やや多く含む。
 - 4 11号住居跡層土。

第374図 18区7号住居

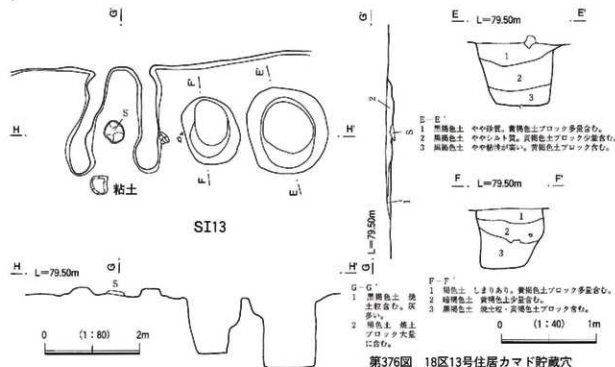
18区13号住居

位置 18区 規模形状 長辺7.20m、短辺4.20m+ α 、方形プランと推定される。残存壁高0.15mを測る。

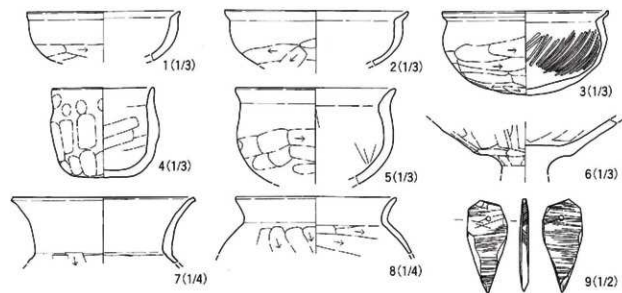


第375図 18区13号住居

主軸方位 東-40°-北 重複 18区6号溝に壊される。床面 は平坦である。カマド 東壁中央や南側に位置する。奥行1.10m、焚き口幅0.45mを測る。燃焼部中央から径22cmの川原石を検出した。支脚と考えられる。支脚の周辺から土師器の破片がかなり多く出土している。柱穴 主柱穴が4基検出された。柱穴1 径0.58m、深さ0.53 柱穴2 径0.58m、深さ0.59m 柱穴3 長軸0.58m、短軸0.50m、深さ0.46m 柱穴4 長軸0.66m、短軸0.60m、深さ0.58m 貯蔵穴 大小2基の楕円形プランの貯蔵穴が検出されている。貯蔵穴の長軸がカマドの軸に一致する。貯蔵穴1は南東隅に位置する。規模は径0.92m×0.85m、深さ0.75mを測る。貯蔵穴2はカマド右脇に位置する。0.72m×0.58m、深さ0.74mの規模である。その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・環・高杯・鉢、石製模造品銅形 所見 6世紀初頭 備考 土師器壺は、胴部がやや球形である。土師器環は、内斜口縁で径12.0cm、13.2cm、14.4cmと大きさにばらつきがある。



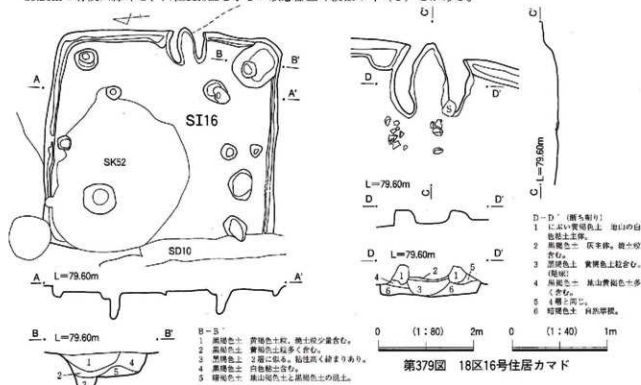
第376図 18区13号住居カマド貯蔵穴



第377図 18区13号住居出土遺物

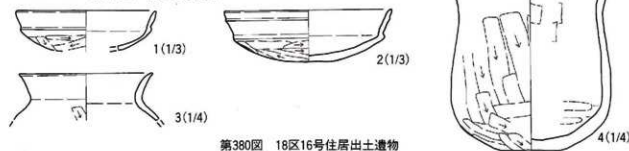
18区16号住居

位置 18区 規模形状 南北4.90m、東西4.60mの方形プランを呈する。残存壁高は0.20mである。主軸方位 東-5°-南 重複 18区18号住居を掘り込み、18区17号住居、10号溝、52号土坑に壊される。床面 は平坦である。貼床が確認される。カマド 東壁中央やや南側に位置する。右軸の先端には凝灰岩の軸石があり、他の部分は白色粘土で構築される。奥行0.75m、焚き口幅0.30mを測る。柱穴 四隅に主柱穴が4基検出されている。貯蔵穴 南東隅に位置する。楕円形プランを呈し、長軸1.00m、短軸0.90m、深さ0.50mを測る。その他付属施設 壁周溝が巡る。幅0.20-0.25m、深さ0.10-0.15mである。遺物 土師器壺・環 所見 6世紀後半 備考 土師器壺は小型である。器肉が厚く口縁に直立気味、胴部は下膨れである。土師器環は、口径13.2cmの有段口縁環と、口径11.0cmと小さい須恵器蓋環模様の環(1)とがある。



第379図 18区16号住居カマド

第378図 18区16号住居

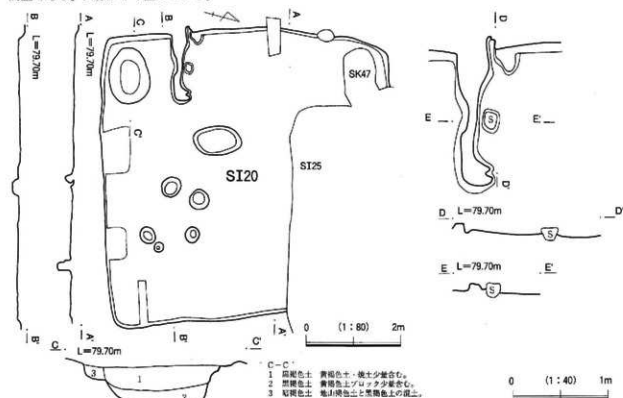


第380図 18区16号住居出土遺物

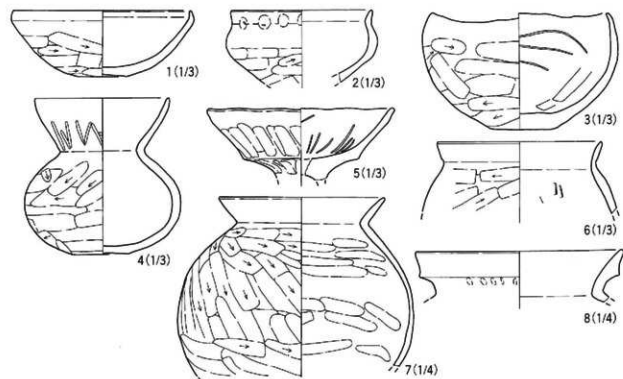
18区20号住居

位置 18区 規模形状 東西6.20m、南北6.10mの正方形プランを呈する。残存壁高0.10mを測る。主軸方位 西-20°-南 重複 18区24号・25号住居、47号土坑に壊される。床面 黄褐色土粒を含む明褐色土で、部分的に厚さ0.03-0.05mの貼床としている。カマド 西壁のやや南側に位置する。左軸と燃焼部だけが残っている。奥行1.10m、燃焼部中央やや左で、支脚に使用されたとみられる15cmほどの川原石がカマドに埋め込まれているが検出されている。柱穴 ビットは数多いが、主柱穴と特定できるものはない。貯蔵穴 南西隅に位置する。楕円形プランで、長軸1.20m、短軸0.85m、深さ0.40mを測る。その他付属施設 なし

遺物 土師器壺・鉢・埴・高埴 所見 5世紀前半 備考 土師器埴は、胴部が球形で口縁がハの字形に開く。埴は、内湾口縁で口唇部が小さく内傾する。暗文は無い。土師器壺は、胴部球形である。高埴は、埴部ナデ調整である。口縁がやや歪んでいる。



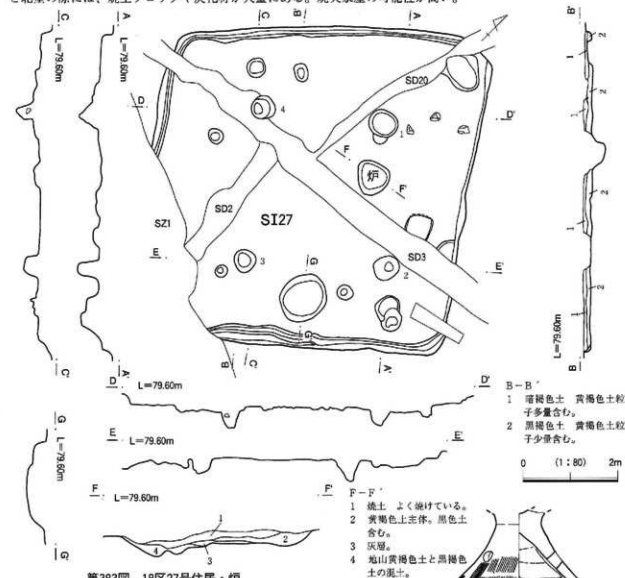
第381図 18区20号住居・カマド



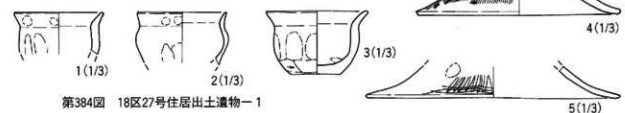
第382図 18区20号住居出土遺物

18区27号住居

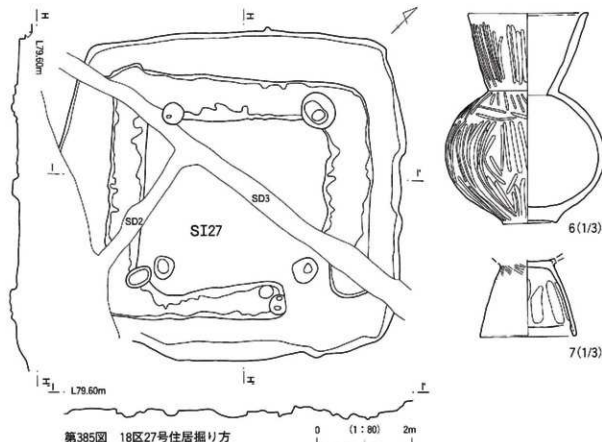
位置 18区 規模形状 長辺6.85m、短辺6.80mの正方形プランを呈する。残存壁高0.18mを測る。 主軸方位北-40° -西 重複 18区1号古墳の周溝、2号・3号・20号溝に横される。 床面 平坦面を形成している。 炉 北側柱穴間中央部より西側に位置する。長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.07mを測る。底面に灰が堆積していた。0.01~0.02mの厚さである。炉の覆土には焼土ブロックが多量に含まれる。 柱穴 4基検出されている。柱穴1 長軸0.34m短軸0.32m深さ0.51m 柱穴2 長軸0.32m短軸0.28m 柱穴3 径30m深さ0.30m 柱穴4 径0.30m深さ0.58m 貯蔵穴 南側柱穴間中央部やや東側に位置する。楕円形を呈し、長軸1.08m、短軸0.95m、深さ0.21mを測る。 その他付属施設 炭屑溝を北、南、西壁で検出した。幅0.10~0.20m深さ0.05~0.10mである。 遺物 S字埴、鉢、甕蓋、群台、高埴 所見 古墳前期 備考 住居床面全体に灰が残る、北半分の東壁と北壁の際には、焼土ブロックや炭化材が多量にある。焼土家屋の可能性が高い。



第383図 18区27号住居・炉



第384図 18区27号住居出土遺物-1

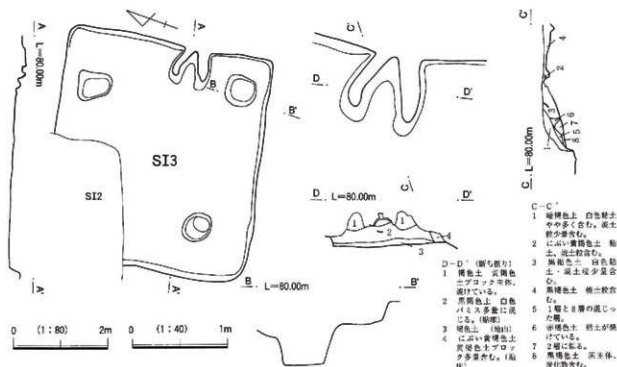


第385図 18区27号住居掘り方

第386図 18区27号住居出土遺物-2

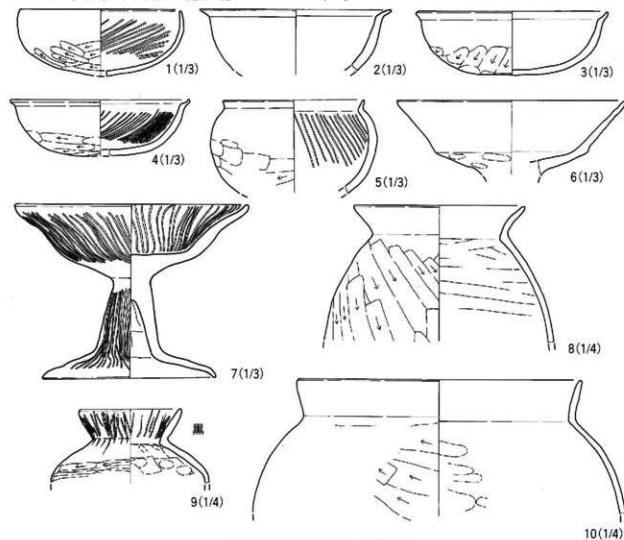
19区 3号住居

位置 19区 規模形状 東西4.90m、南北4.40mの長方形プランを呈する。残存壁高は0.24mを測る。



第387図 19区 3号住居・カマド

主軸方位 東-22°-北 重複 4号住居を掘り込み、2号住居に壊される。床面 平坦面を形成している。貼床が確認される。カマド 東壁中央やや南にある。奥行0.85m、焚き口幅0.20m、燃焼部中央に土師器の高坏が伏せられていた。支脚と考えられる。柱穴 主柱穴が2基。それ以外は不明。貯蔵穴 南東隅にある。径0.70m円形プランを呈する。深さは0.35mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・広口壺・高坏 所見 5世紀後半 備考 土師器壺の胴部はかなり丸みがある。口縁が広く大型のものもある。土師器高坏は、内斜口縁と内凹口縁が主体であるが、口縁の大きなもの、やや小さなもの、深いものと浅いものなどバリエーションがある。高坏は、内外面に暗文が施されるタイプである。



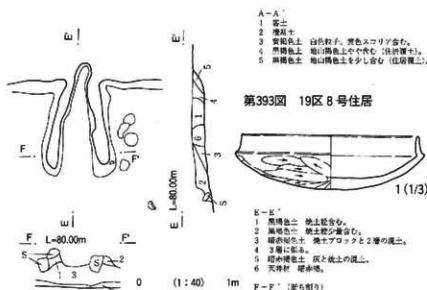
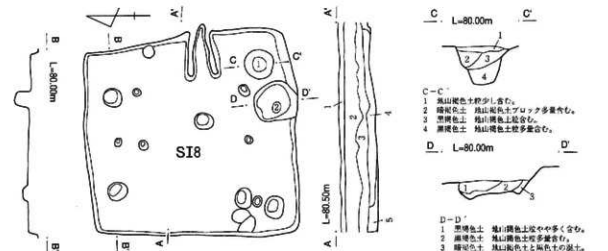
第388図 19区 3号住居出土遺物

19区 5号住居

位置 19区 規模形状 一辺5.20mの正方形プランを呈する。残存壁高は0.20mである。主軸方位 東-27°-北 重複 6号住居に壊される。床面 ほぼ平坦である。貼床が確認される。カマド 東壁中央やや南にある。奥行1.05m、焚き口幅0.50m。両袖の先端に川原石が据えてある。また、カマドの燃焼部左奥に10cmほどの川原石が据えてある。支脚と考えられる。柱穴 隅に主柱穴がある。貯蔵穴 カマドの右・住居の南東隅にある。1.05m×0.90mの楕円形プランで、深さは0.33mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・高坏・甕・甕蓋 所見 5世紀末 備考 土師器壺はやや長胴化している。土師器高坏は内斜口縁と内凹口縁の他に、須恵器高坏模倣の坏がある。口縁が直立し、体部はやや深い。No12の甕は、焼成後外面から傘孔している。

19区8号住居

位置 19区 規模形状 南北4.60m東西4.45mの台形プランを呈する。残存壁高は0.08mである。主軸方位北 10° 北 重複 39号住居を掘り込み、31号・32土坑に壊される。床面 はほぼ平坦である。貼床が確認される。カマド 奥行1.20m焚き口幅0.40m。向軸の先端に凝灰岩（袖石）が据えられている。柱穴 四隅に主柱穴がある。貯蔵穴 2基検出している。貯蔵穴1は、住居南東隅にある。0.6mの円形プランで、深さは0.41mである。貯蔵穴2は、貯蔵穴1の西にある。0.9m $\times$ 0.8mの楕円形プランで、深さ0.23mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器壺・坏 備考 土師器坏は、須志器坏身模倣で口径14.0cmとやや大型である。土師器壺は小型で、肉厚なのが特徴的である。



第394図 19区8号住居カマド

第393図 19区8号住居

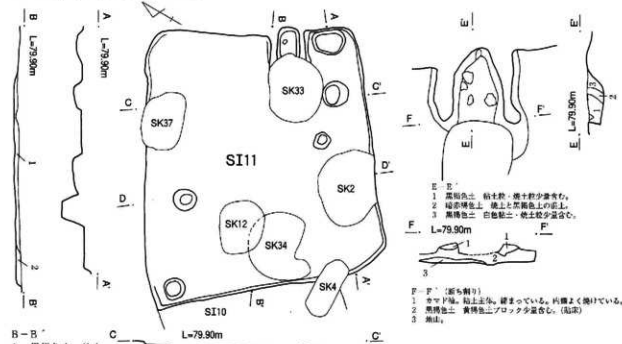


第395図 19区8号住居出土遺物

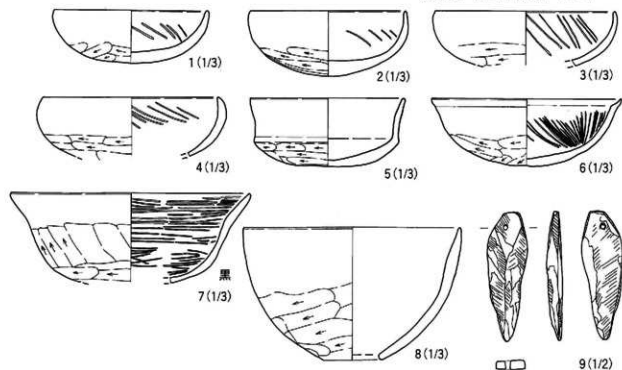
19区11号住居

位置 19区 規模形状 東西5.9m南北4.75m、やや歪んだ長方形プランを呈する。残存壁高は0.08mを測る。主軸方位 東 26° 北 重複 10号住居を掘り込み、土坑2・12・33・34・37に壊される。床面 はほぼ平坦である。カマド 東壁中央やや南にある。カマド焚き口部付近は土坑によって壊される。奥行0.7m $\times$ a、焚き口幅不明。柱穴 主柱穴3基検出された。貯蔵穴 住居南東隅にある。0.7m $\times$ 0.5mの楕円形プランで、深さ0.14mである。その他付属施設 なし 遺物 土師器坏・瓶、石製模造品銅形 所見 6世紀第1四半期

備考 土師器坏は、内穹口縁と内斜口縁、模倣坏がある。大型化したものがある。特に大きい坏（7）は内面へラミガキ後、黒色処理をしている。



第396図 19区11号住居・カマド



第397図 19区11号住居出土遺物